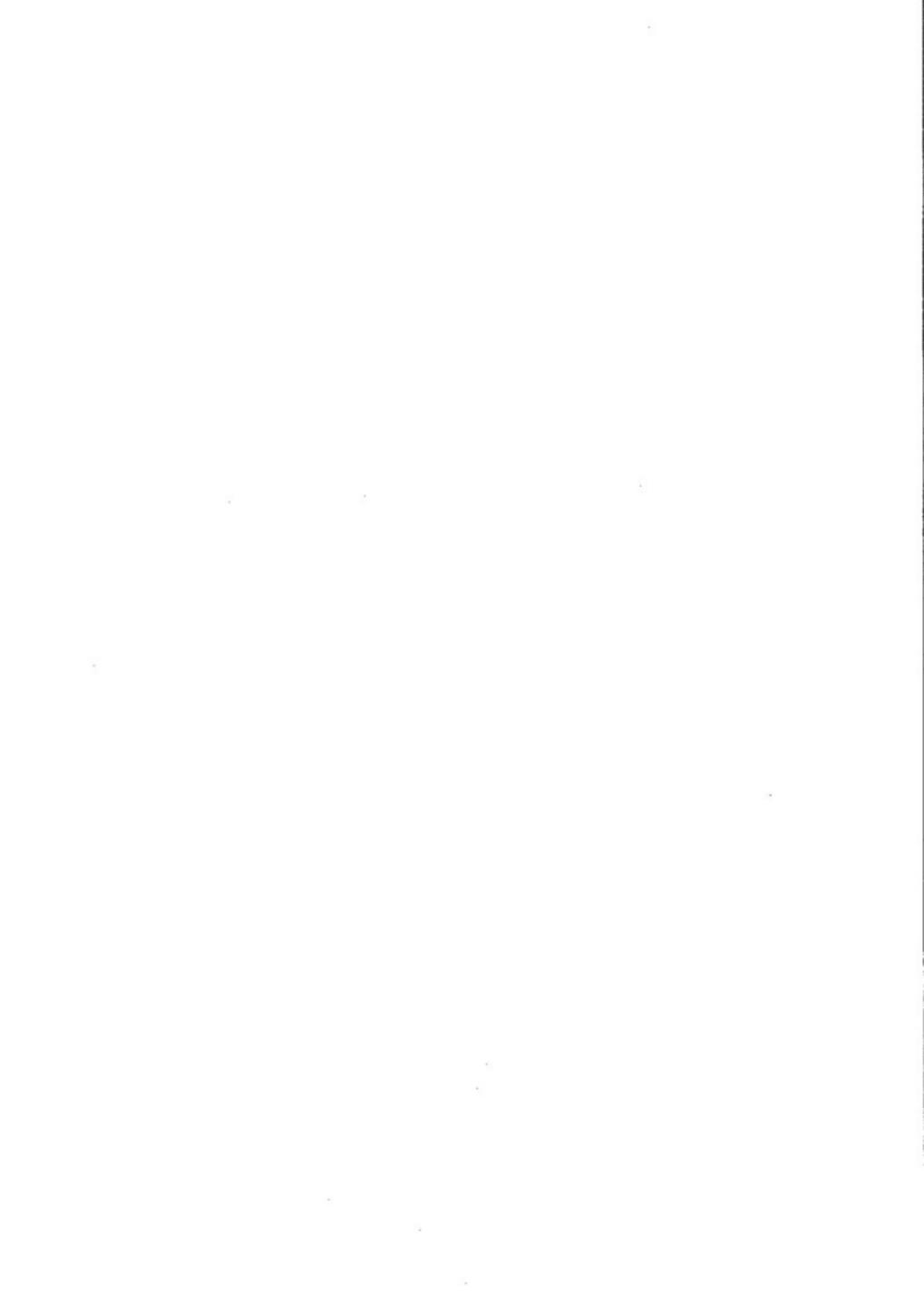


財團法人 八尾市文化財調査研究会報告103

- I 久宝寺遺跡（第64次調査）
- II 久宝寺遺跡（第66次調査）
- III 久宝寺遺跡（第67次調査）
- IV 久宝寺遺跡（第69次調査）
- V 久宝寺遺跡（第72次調査）

2007年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



財團法人八尾市文化財調査研究会報告103

- I 久宝寺遺跡（第64次調査）
- II 久宝寺遺跡（第66次調査）
- III 久宝寺遺跡（第67次調査）
- IV 久宝寺遺跡（第69次調査）
- V 久宝寺遺跡（第72次調査）

2007年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、平成17～18年度に久宝寺遺跡で実施しました5件の公共下水道事業に伴う調査成果を収録したものであります。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎健二

序

1. 本書は、財團法人八尾市文化財調査研究会が平成17年度および平成18年度に実施した、寝屋川流域下水道事業に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成19年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
 1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・IV西村公助、II坪田真一、III・V樋口 薫で、全体の構成・編集は坪田が行った。
 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1(平成8年7月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』(平成18年度版)をもとに作成した。
 1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
 1. 本書で用いた方位は磁北及び座標北(國土座標第VI系[日本測地系])を示している。
 1. 造構は下記の略号で示した。
土坑 - SK 溝 - SD
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
弥生土器・土師器-白、須恵器-黒、木器-斜線
1. 土色については『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

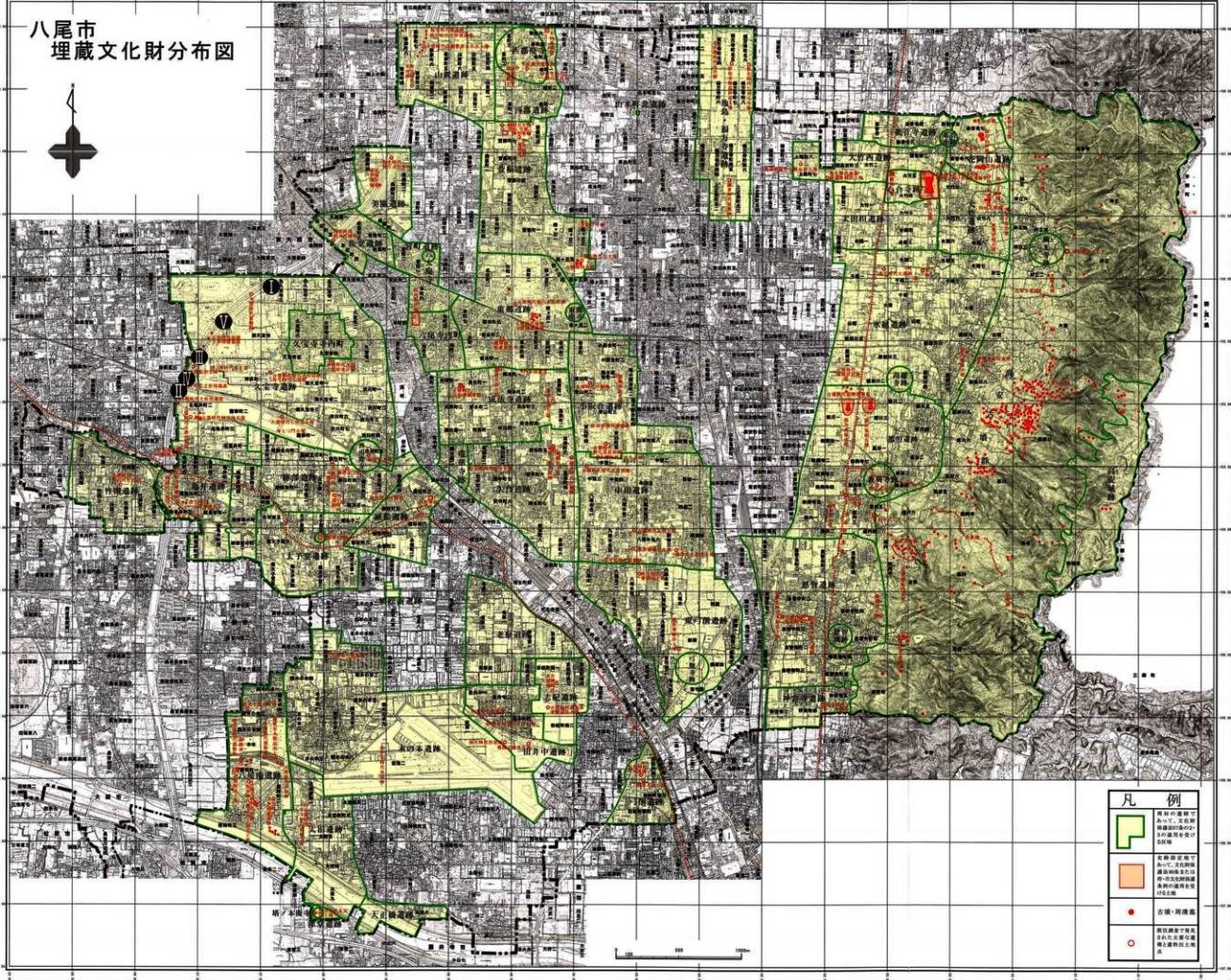
序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 久宝寺遺跡第64次調査(KH2005-64).....	1
II 久宝寺遺跡第66次調査(KH2005-66).....	15
III 久宝寺遺跡第67次調査(KH2005-67).....	23
IV 久宝寺遺跡第69次調査(KH2006-69).....	27
V 久宝寺遺跡第72次調査(KH2006-72).....	35

報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図



凡 例
○ 墓地・古墳群
● 古墳・周辺施設
■ 文化財埋蔵地図上に記載する 遺跡・史跡の位置と その範囲を示す
■ 墓地・古墳群

I 久宝寺遺跡第64次調査（K H2005-64）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市北久宝寺3丁目地内で実施した寝屋川流域下水道中央南増補幹線(一)(第4工区)下水管渠建築工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第64次調査(KH2005-64)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪府東部流域下水道事務所から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成17年5月16日～平成17年7月14日(実働15日)の期間で、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約110m²を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は市森千恵子・國津れいこ・曹龍・中村百合・實樹婦美子・村田知子である。
1. 内業整理は、現地調査終了後隨時実施し、平成18年9月に終了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－國津・鈴木裕治・徳谷尚子・實樹、トレース・執筆・編集－西村が担当した。

本　文　目　次

1.はじめに.....	1
2.調査概要.....	3
1) 調査の方法と経過.....	3
2) 層序.....	3
3) 検出遺構と出土遺物.....	5
3.まとめ	9

I 久宝寺遺跡第64次調査 (KH2005-64)

1. はじめに

久宝寺遺跡は、大和川の主流であった長瀬川左岸の沖積地にあたる縄文時代晩期～近世の複合遺跡である。当遺跡は八尾市の北西部に位置し、現在の行政区画では北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・北龜井・龍華町・渋川町が遺跡範囲にあたり、規模は東西約1.8km・南北約1.7kmを測る。

当遺跡範囲内の北東側には、室町時代末期～江戸時代の居住域を検出した久宝寺寺内町があり、当遺跡と跡部遺跡にまたがる位置には奈良時代の遺構を検出した渋川庵寺が存在している。当遺跡の周辺には、長瀬川を挟んだ対岸の北東側に佐堂遺跡・東側に宮町遺跡・八尾寺内町遺跡・成法寺遺跡が存在している。また、南西には龜井遺跡が、南東には跡部遺跡が隣接し、西には加美遺跡が隣接している。

当遺跡は、昭和10年に久宝寺5丁目で実施された道路工事中に、弥生土器や土師器・須恵器、そして丸木舟の残片が出土したことが発見の契機となった。その後、昭和55～61年に(財)大阪文化財センター(現、財團法人大阪府文化財センター以下、府センターと記載)によって実施された近畿自動車道建設に伴う発掘調査により、縄文時代晩期～近世の遺跡であることが判明した。また、旧国鉄の竜華操車場跡地内では、昭和63年以後、府センター、八尾市教育委員会(以下、市教委と記載)、財團法人八尾市文化財調査研究会(以下、当研究会と記載)により調査が実施され、縄文時代晩期～近世の遺構および遺物の検出があった。中でも府センターによる大阪竜華都市拠点土地区画整理事業(都市機能更新事業)に伴う多目的広場建設に先立つ発掘調査で検出された古墳時代前期の久宝寺1号墳(西村2003)および、寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設に伴う発掘調査で検出された古墳時代初頭～前期の約60基に及ぶ墳墓群は特筆される。

今回報告する第64・66・67・69・72次調査地は当遺跡内の北西に位置し、各調査地は、近畿自動車道と近接する位置に所在する。第64次調査地の北西では、府センターによる久宝寺北(その1)の調査が実施されており、Fトレンチでは、古墳時代に流れていた流路幅120m以上、深さ約4mの大規模な河川を検出している。この河川からは韓式系土器が土師器や須恵器に混ざって出土している(寺川他1987)。第66次調査の1区は龜井北(その1)A地区に近接し、この調査では古墳時代前期の居住域の存在が明らかになっている(小野他1986)。また、2区は久宝寺南(その2)I区の東側に近接しており、この調査では古墳時代初頭後半の溝の中から船材が出土している(赤木他1987)。第67次調査に近接する地点では、府センターによる久宝寺南(その3)の調査が実施されており、中世の鶴溝と、それ以前に堆積した層厚2mを越す河川堆積物を確認している(赤木他1986)。また、西方では当研究会による第14次調査(坪田1993)、東方では第32次調査(森本2000)が行われ、古墳時代前期の居住域に伴う遺構・遺物が多量に検出されている。第69次調査地は久宝寺南(その2)J区の東側に近接している。この調査地では弥生時代末～古墳時代初頭前半(庄内期古段階)と古墳時代初頭後半(庄内期新段階)の居住域を確認している(赤木他1987-1)。第72次調査地は久宝寺南(その1)Bトレンチの東側に近接している。ここでは縄文時代の河川の他、弥生時代中期末～後期初頭、及び古墳時代前期(布留式期)の墓域が検出されている(赤木他1987-2)。



第1図 調査地周辺図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は寝屋川流域下水道中央南増補幹線(一)(第4工区)下水管渠築造工事に伴う調査で、当研究会が久宝寺遺跡内で行った第64次調査にある。

調査は発進立坑部分1箇所(規模 $10.5 \times 10.5\text{m}$ 面積約 110m^2)である。掘削は市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約 1.5m 前後までを機械、以下約 3.5m の深さは人力と機械により掘削し、遺構の検出に努めた。なお、文化財調査終了後のT.P.+2.7m以下からT.P.-6.42mの地層については工事掘削時に立会い、地層の確認を行った。

地区割は、調査地を覆う南北 20m 、東西 20m の範囲に設定した。区割りは、座標のX=-152130000、Y=-380300000を基準点とし、 10m 毎に南へアラビア数字(1・2)、東へアルファベット(A・B)を付けた。地区名は、各地区を1 A区～2 B区と呼称した。

2) 層序

0層 盛土。上面の標高はT.P.+7.74m前後を測る。

1層 5Y6/1灰色細粒砂混粘土。上部は粘土を主体とし細粒～粗粒シルトが混入する土壤化層。遺物の出土がないため層の時期は不明である。上面の標高はT.P.+6.2～6.3m前後を測り、近隣での調査成果から古墳時代後期以降に相当する。上面は1面で、遺構および遺物の検出はなかった。

2層 10YR4/4褐色細粒砂混粘質土。粗粒砂を主体とする。上面は土壤化している。近隣での調査成果から古墳時代中期～後期頃の地層に相当する。

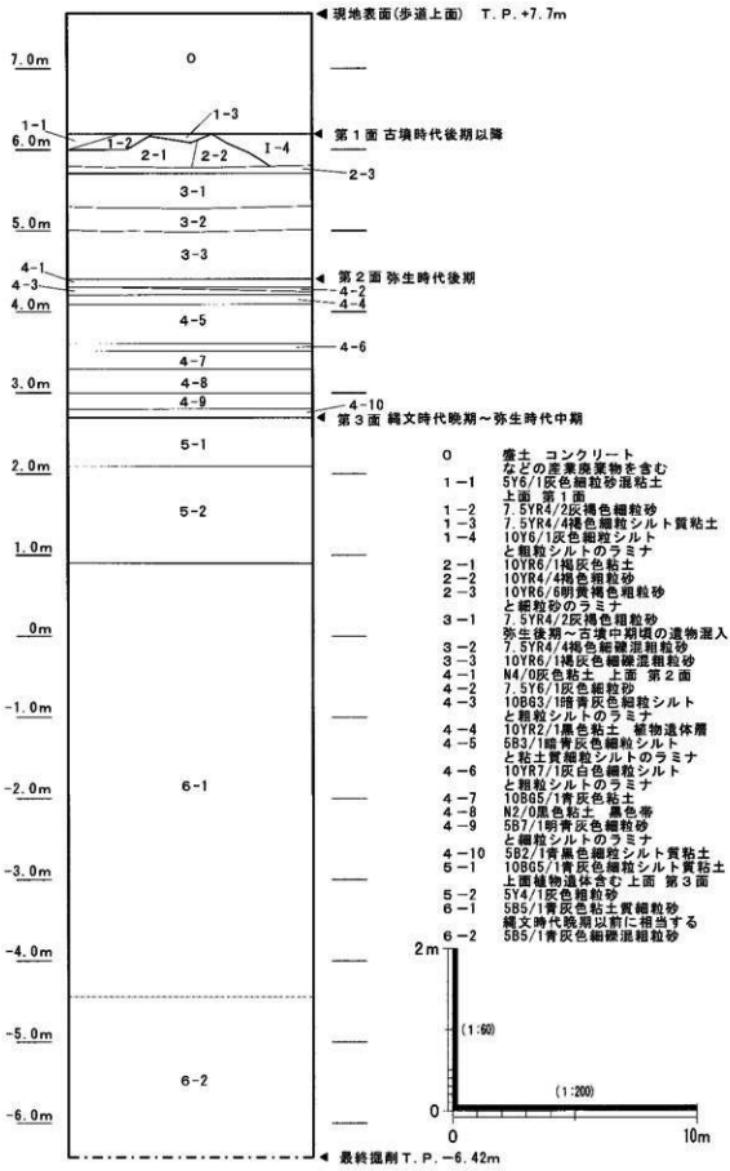
3層 7.5YR4/2灰褐色粗粒砂～細粒砂。河川堆積で、弥生時代後期～古墳時代中期の遺物が出土している。

4層 N4/0灰色粘土。3層の川底に相当する自然堆積層で、上面はT.P.+4.4m前後である。粘土が主体で、間に細粒シルトがラミナ状に入る。近隣での調査成果から上面は弥生時代後期に相当する。上面は2面で、遺構および遺物の検出はなかった。

5層 10BG5/1青灰色細粒シルト質粘土。上面には植物遺体を含んでおり、土壤化している。上面はT.P.+2.7m前後である。近隣で過去に行われている調査成果から上面は縄文時代晩期～弥生時代中期に相当する。上面は3面で、遺構および遺物の検出はなかった。

6層 5B5/1青灰色細礫混粗粒砂。縄文時代晩期以前の堆積層である。





第3図 南壁面図

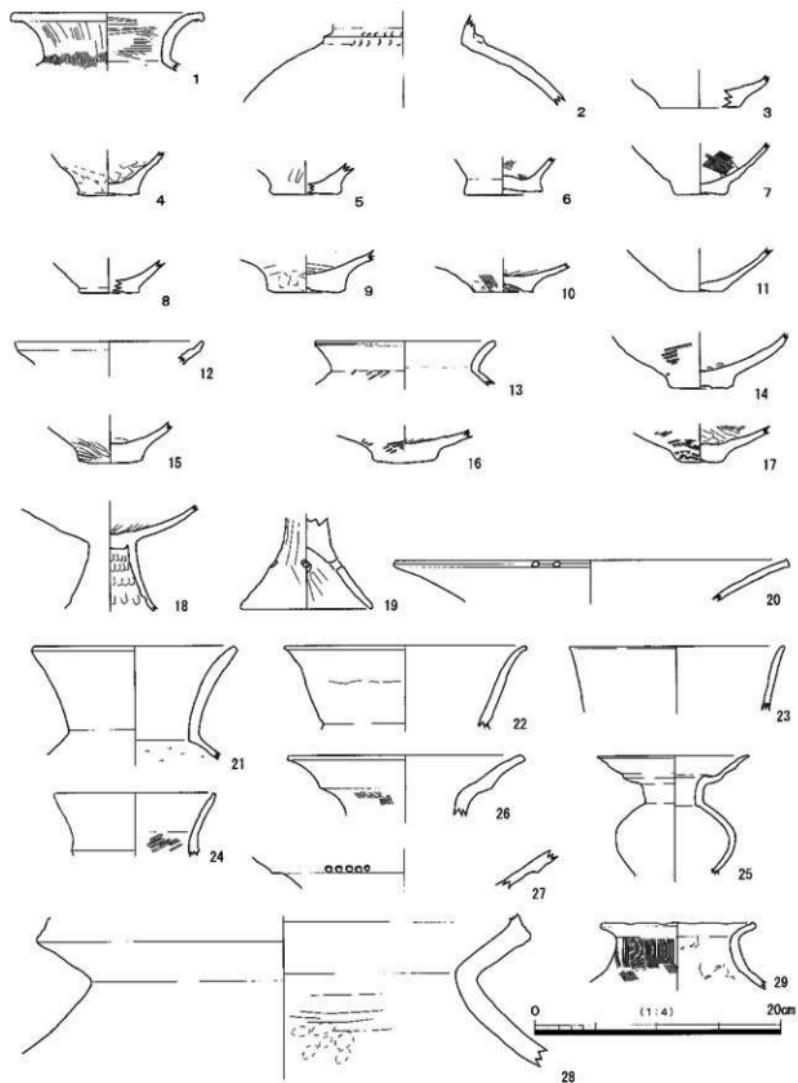
3) 検出遺構と出土遺物

1層上面は古墳時代後期以降に、4層上面は弥生時代後期に、5層上面は縄文時代晚期～弥生時代中期に相当するが、遺構の検出はなかった。3層の河川堆積からは弥生時代後期～古墳時代中期の弥生土器、土師器等が出土した。このうち図化したものは1～70である。

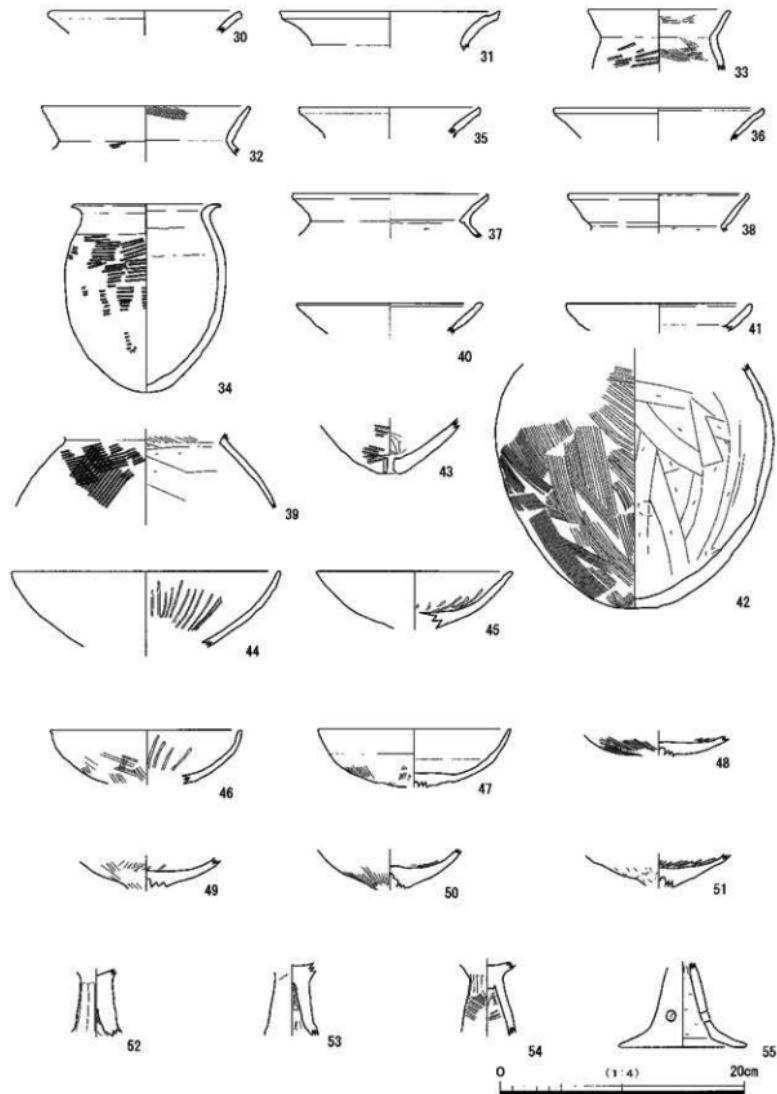
1～19は弥生時代後期の土器である。1は壺の口縁部である。外反する口縁部で、端部は下方へ少しつまみ出し面をもつ。内面ハケを施し、体部はケズリによる砂粒の移動が見られる。2は壺の体部である。口縁部と体部の境に突窓を1条貼り付け、その上下にC字形の半裁竹管文を施す。3～11は壺の底部である。12～17は甕である。18は高杯の杯部～脚部で、杯部内面に放射状のミガキを、脚部内面にヘラによるナデを施している。19は高杯の脚部～裾部で、脚部は中実である。裾部上位に4方向のスカシ孔を施す。

20～60は古式土師器である。20は壺の口縁部で、端部は面をもつ。端面には沈線を一条巡らし、円形浮文を貼り付ける。21～24は外反ぎみに直線的に伸びる直口の壺である。21の体部内面にはケズリがみられる。25～28は複合口縁壺である。25は球形の体部の底が開いており、さらに下へ広がる器形である。27の口縁部外面には、円形竹管文を押す。28は大形の壺で、器形から外來系(東部瀬戸内産)と思われる。29は内頃する頸部から外反する口縁部をもつ壺である。端部は上方へつまみ上げ、面をもつ。頸部に指頭圧痕の後縦方向にハケを施している。内面には全体的に粘土接合痕がみられる。30～42は壺である。30～34はV様式系である。33と34の外面には太筋のタタキを施す。35～39は庄内式壺である。35～38は口縁部で、端部はつまみ上げ、面をもつ。39は体部で、内面ケズリ、外面右上がりのタタキを施す。また、口縁部内面にはヘラ状工具による左上がりのキザミ目を施す。40・41は布留式甕である。42は内面ケズリ後ナデ、外面ハケを施す布留式甕と思われる。43は底部有孔土器で、体部外面にタタキを施す。44～55は高杯である。44は内湾する口縁部。45は平らな杯底部から直線的に上外方へ伸びる。内面に放射状のミガキを施す。46は内湾する口縁部で、内面に放射状のミガキを施す。外側はハケを施す。47は平らな底部から内湾する口縁部で、外側にハケを施す。48～50は平らな杯部。内面放射状ミガキ、外側ハケを施す。51は平らな杯部。内面放射状ミガキ、外側ナデを施す。52～54は脚部。55は脚部～裾部である。52は外縦方向のミガキを施す。53の内面にはしばり目が残る。54の内面にはヘラ状工具による圧痕が残る。55は「ハ」の字に聞く裾部。スカシ孔3箇所あり。内面ケズリを施す。外側は表部磨耗のため調整不明である。56～58は鉢。57は口縁部に山陰系の特徴をもつ。58は内外面にハケを施す。59・60は器台。59は受部内面に放射状ミガキを施す。60は外側面にハケを施す。

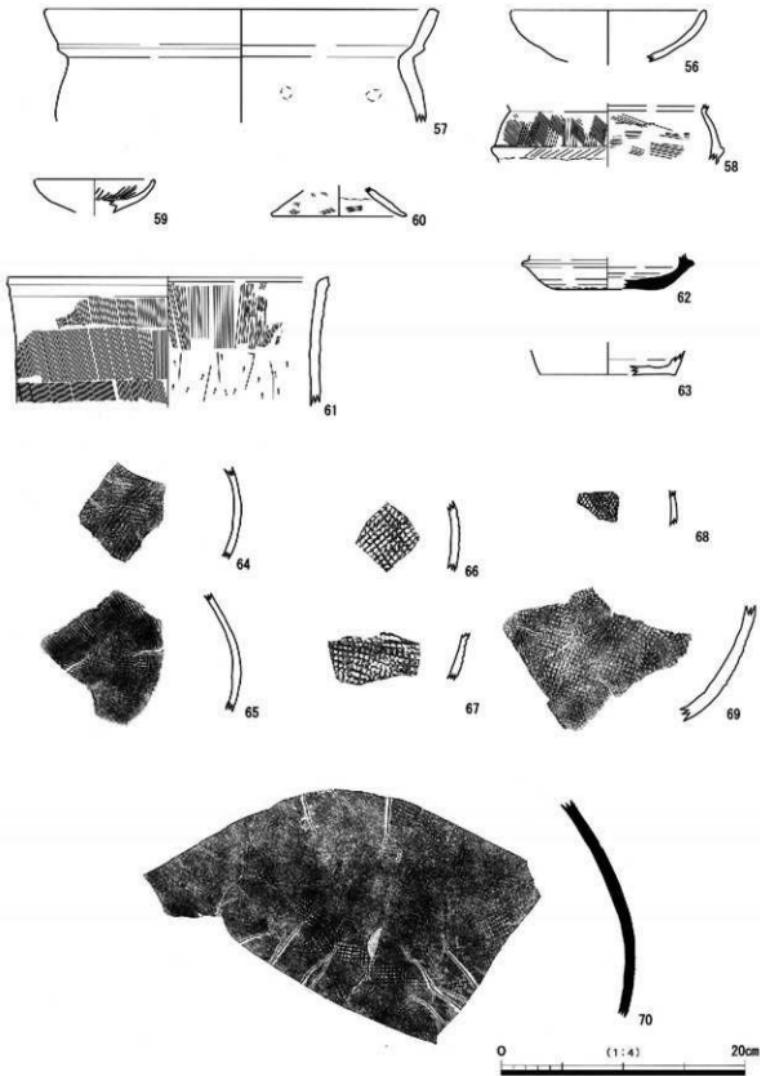
61は土師器瓶の口縁部で、外側に縦方向のハケを施す。内面は下位にケズリ、上位に縦方向のハケを施す。62は須恵器杯身である。内外面に回転ナデを施す。63は韓式系土器平底鉢で、内外面ともにナデを施す。64～69は韓式系土器で、器種は不明であるが、壺か甕に該当すると思われる。上器は軟質である。64は内面ナデ。外側格子タタキを施す。格子タタキは重なりあるいは不鮮明である。65は内面ナデ。指頭圧痕あり。外側格子タタキを施す。格子タタキは細かい。66・67は内面ナデ。外側格子タタキを施す。格子タタキは粗い。68は内面ナデ。外側斜格子タタキを施す。69は内面ナデ。外側正方形の格子タタキを重複して施す。70は須恵器で、器種は不明であるが、壺か甕に該当すると思われる。内面ナデ。外側に正方形の格子タタキを施し、後にナデを施す。



第4図 3層出土遺物実測図 I



第5図 3層出土遺物実測図II



第6図 3層出土遺物実測図III

3.まとめ

調査の結果以下のことが明らかになった。

縄文時代晚期以前に相当する6層は細粒砂～粗粒砂で、流水堆積層である。

縄文時代晚期～弥生時代中期に比定できる5層上面は、植物遺体を多く含み一時期の地表面が存在していたと思われるが、人間の活動の痕跡は確認できなかった。

弥生時代後期に相当する4層上面では、遺構の検出はなかった。しかし、調査地の南西側約100m地点の大坂文化財センターが行った近畿自動車道建設に伴う調査地（以下、近道調査と記載）では同時期の遺構を検出していることから、同時期の集落は今回の調査地までは広がっていないと推測できる。

弥生時代後期～古墳時代中期には調査区全体が河川跡（2層・3層）であることが判明した。この河川は、近道調査でも検出しており、南から北へ向かって流れていたと推測できる。河川内の3層からは土器がコンテナ箱2箱分出土したが、土器の表部の磨耗がほとんど見られないことから、上流の近い場所に同時代の集落が存在していた可能性が高いと推測できる。

1層上面は古墳時代後期以降に相当する地層であるが、遺構の存在は明らかにできなかった。しかし近道調査では、奈良時代や平安時代の遺構・遺物を検出していることから、近接した場所に同時代の生活の痕跡があることは確実と思われる。

参考文献

- ・小野久隆他 1986『亀井北(その1)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』財團法人 大阪文化財センター
- ・赤木克視他 1986『久宝寺南(その3)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・寺川史郎他 1987『久宝寺北(その1～3)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』財團法人 大阪文化財センター
- ・赤木克視他 1987-1『久宝寺南(その2)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』財團法人 大阪文化財センター
- ・赤木克視他 1987-2『久宝寺南(その1)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』財團法人 大阪文化財センター
- ・坪田真一 1993「10.久宝寺遺跡第14次調査(K H92-14)」[平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告] (財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 2000「15.久宝寺遺跡第32次調査(K H99-32)」「平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村 歩他 2003「八尾市亀井地内所在 久宝寺遺跡・竪草地区発掘調査報告書V -大阪竪草都市拠点上地区画整理事業(都市機能更新事業)に伴う発掘調査-」(財)大阪府文化財センター調査報告書 第103集」(財)大阪府文化財センター
- ・坪田真一 金親満夫 2004「淡川廃寺 第2次調査 第3次調査」財團法人八尾市文化財調査研究会報告79 財團法人八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 2004「久宝寺寺内町遺跡 第1次調査-「八尾市まちなみセンター」建設工事に伴う発掘調査報告書-」財團法人八尾市文化財調査研究会報告80 財團法人八尾市文化財調査研究会



調査地周辺(南東から)



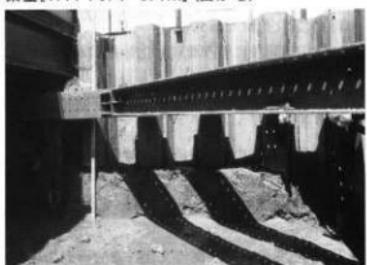
調査地周辺(南西から)



東壁[T.P. +6.4~5.7m](西から)



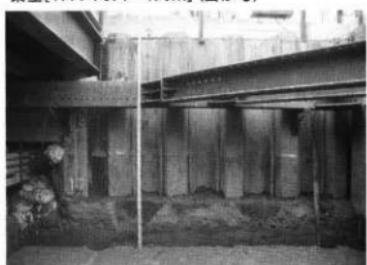
第1面(南から)



東壁[T.P. +5.7~4.9m](西から)



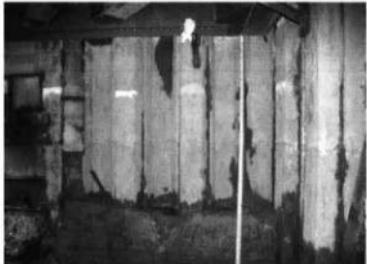
第2面(南から)



東壁[T.P. +4.9~3.9m](西から)



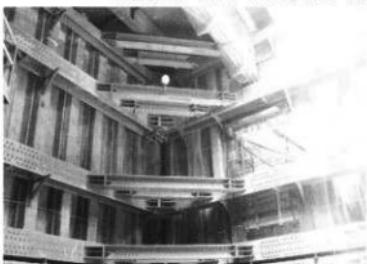
第3面(南から)



西壁[T.P. +4.4~3.3m] (東から)



掘削状況[T.P. -6.4mまで] (南から)



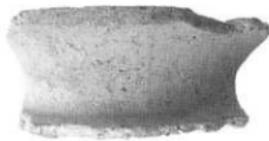
掘削状況[T.P. -6.4mまで] (南西から)



掘削状況[T.P. -6.4mまで] (南西から)



北東壁[T.P. -6.4m前後] (南西から)



1

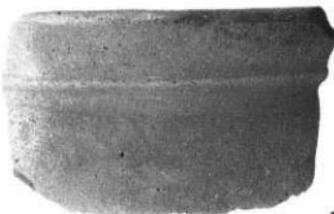
2
出土遺物



25



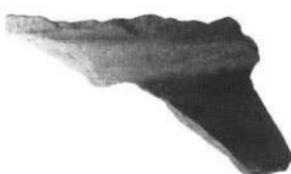
34



57



26



28



29



61

出土遺物



63



64



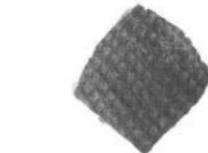
65



66



67



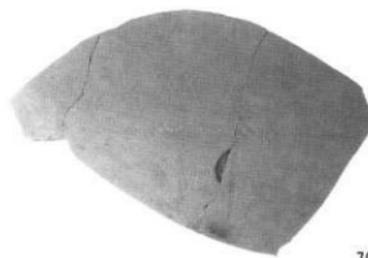
68



69



70



出土遺物



II 久宝寺遺跡第66次調査（K H2005-66）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市神武町他で実施した寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター送泥管築造工事(第2工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第66次調査(KH2005-66)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪府東部流域下水道事務所から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成18年2月17日～3月3日(実働10日)の期間で、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約27m²を測る。
1. 現地調査においては垣内洋平・曹　龍・田島宣子・村井厚三・若林久美子が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後隨時実施し、平成18年9月に終了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－岩沢玲子・永井律子・中村百合、図面トレース・執筆・編集－坪田が行った。

本　文　目　次

1. 調査概要.....	15
1) 調査の方法と経過.....	15
2) 検出遺構と出土遺物.....	16
2. まとめ.....	18

II 久宝寺遺跡第66次調査 (K H2005-66)

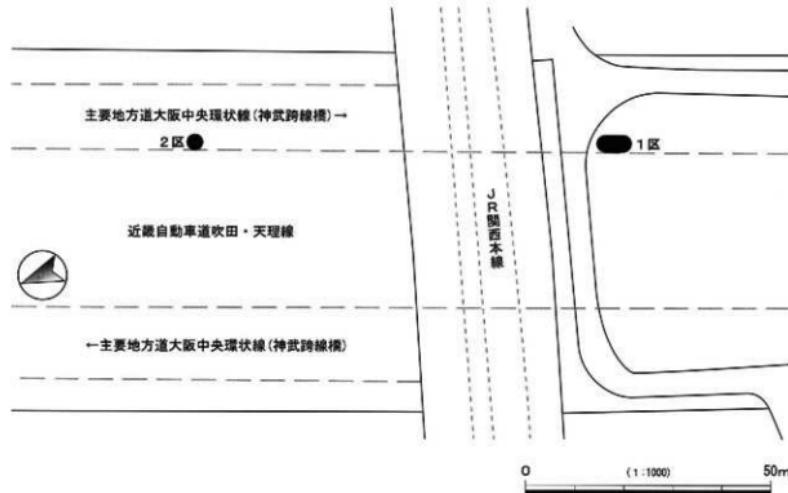
1. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター送泥管築造工事(第2工区)に伴う調査で、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第66次調査(K H2005-66)である。調査地は立坑部分2箇所で、主要地方道大阪中央環状線(下り)がJR関西本線を跨ぐ高架部分である神武跨線橋の下に位置している。線路南側が1区(約20m)、北側が2区(約7m)である。中央環状線と並行する近畿自動車道吹田・天理線では、府センターによる調査が実施されており、1区は亀井北(その1)A地区、2区は久宝寺南(その2)I区の東側に接続している。

1区は東西3.5m・南北約7.1mの平面長円形である。ライナープレート工法による立坑で、掘削を進めながら高さ50cmの鋼板を長円形に組んで下に継ぎ足して行く工法である。遺憾ながら調査着手時点で現地表下約3.8mまでのライナープレート設置が完了しており、また設置の際の攪乱がさらに約0.5m下部にまで及んでいた。このため調査は現地表下約4m以下の1.5mを対象とした。断面観察には調査区中央に南北トレンチを設定し、層位に従って人力掘削を進めた。なお現地表下約3.8mまでの掘削土については、残土置場において遺物採取を行った。

2区は平面形が直径3mの円形を呈する。ケーシング工法による立坑で、高さ2m・直径3mの鉄枠を回転圧入により沈め込んで行く工法で、圧入の際、内部には水が充填され、その後内部



第1図 調査区位置図

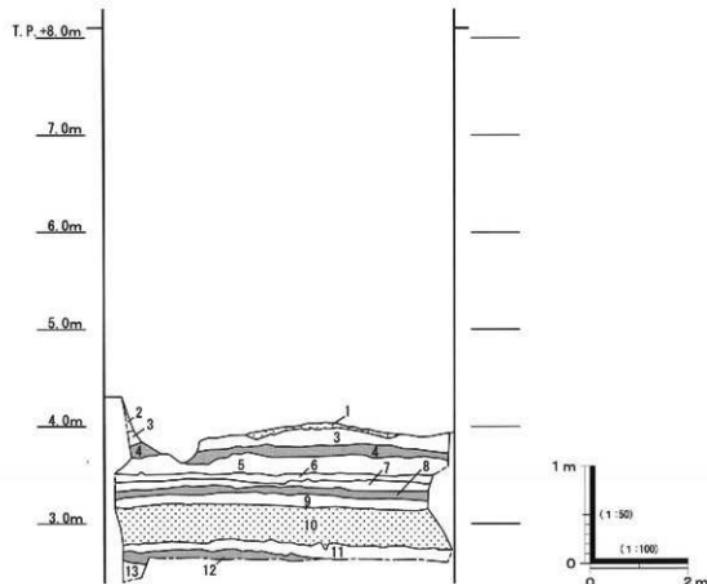
の土を掘削するというものである。この工法においては、人力掘削はもとより平面調査・断面観察も不可能であると判断され、現地表下約7mまでの重機掘削の立会、及び掘削土中からの遺物採取を実施した。

2) 検出遺構と出土遺物

〈1区〉

層位に従って調査を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。ここではトレンチ西壁断面による層序を記す。基本的にほぼ水平な水成堆積が続いている。西に近接する龜井北(その1)A地区の層位にはほぼ対応しており、その関係を併記する。

- 1層: 10Y4/1灰色細粒砂～中粒砂。層厚不明。龜井北自然河川4(弥生時代中期～後期)のオーバーフローによる砂層と考えられる。
- 2層: 2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土。細かい植物遺体を多く含む。層厚不明。龜井北第X X II層。
- 3層: 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。細かい植物遺体を少量含む。層厚10～20cm。龜井北第X X III層。
- 4層: 7.5Y2/1黒色粘土。管状・粒状に5層を含む。層厚10cm。龜井北第X X IV層: 第三黑色粘土。
- 5層: 7.5GY3/1暗緑灰色粘土。層厚20cm。龜井北第X X V - 1層。
- 6層: 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。層厚5～10cm。龜井北第X X VII層。龜井北では上面で弥生時代前期・中期の遺構が検出されている。

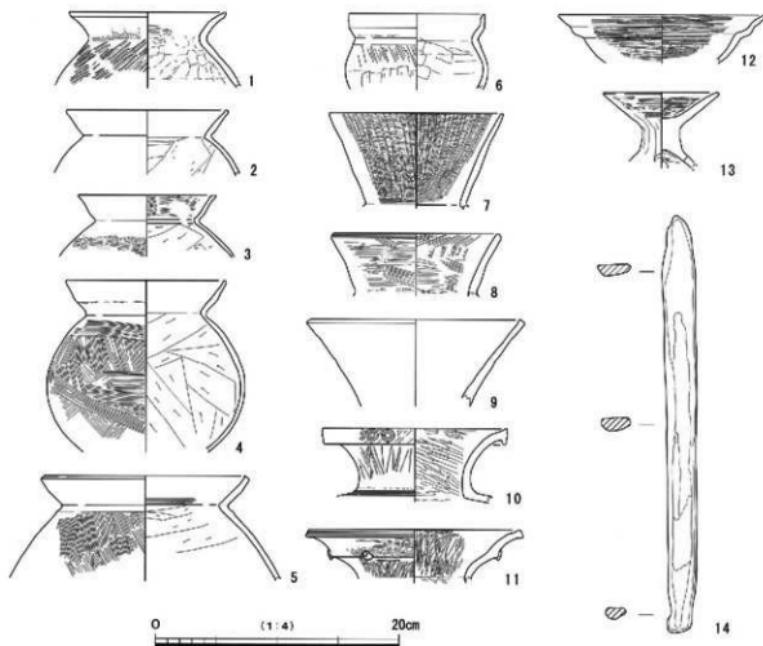


第2図 1区中央西壁断面図

- 7層：7.5GY5/1緑灰色粘土。層厚3~10cm。亀井北第XXVII層。
- 8層：2.5GY2/1黒色粘土。層厚10cm。亀井北第XXVII層：第四黑色粘土。
- 9層：2.5GY5/1オリーブ灰色粘土。層厚10~15cm。亀井北第XXIX-2層。
- 10層：7.5Y4/1灰色シルト混極細粒砂~細粒砂。下部は粘土質シルト薄層との互層状を呈する。
層厚40cm。亀井北第XXIX-3層。
- 11層：2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土。上部約5cmは植物遺体をラミナ状に多量に含む層相である。層厚10~20cm。亀井北第XXXI層。
- 12層：5GY2/1オリーブ黒色粘土。層厚10cm。亀井北第XXXII層：第六黑色粘土。
- 13層：7.5GY4/1暗緑灰色粘土。層厚20cm以上。亀井北第XXXIII層。

出土遺物

先述のように、残土置場における遺物採取を実施したところ、現地表下2~3m付近の層から古墳時代初頭~前期に比定される土器・木製品がコンテナ1箱程度出土している。1~14を図化した。



第3図 1区出土遺物

1～5は壺で、4が約1/2の残存、他は小片である。1はV様式系壺で、復元口径12.8cmを測る。口縁部外面下半にタテハケを施す。2～4は布留式壺、5は布留式傾向の庄内式壺である。口縁端部の形状は、小さく巻き込む2、水平な面を成す3、丸く收める4、内上方に摘み上げる5がある。体部外面の調整は2がナデ、他はハケである。壺には全てに煤の付着が認められる。6～10は壺である。6は複合口縁の小形丸底壺で、復元口径11.0cmを測る。調整は体部外面下位がヘラケズリ、他はナデである。7は精製の直口壺で、復元口径14.2cmを測る。口縁部のヘラミガキは外面がヨコ後タテ、内面はヨコ後ナナメ後タテである。タテヘラミガキはジグザグに施されている。8は短頸直口壺で、復元口径13.8cmを測る。口縁端部に一条の沈線を巡らせる。生駒西麓産の胎土である。9は直口壺で、復元口径17.8cmを測る。内外面共にヨコナデによる凹凸が顯著に見られる。10は広口壺で、復元口径15.2cmを測る。調整は口頸部外面ヘラミガキで、口縁端面に二重竹管文を施し、肩部外面に櫛描直線文を巡らせる。11は複合口縁壺で、復元口径17.7cmを測る。調整は口頸部外面ヘラミガキで、口縁部内面最上位に二段、外面中位に一段の櫛描波状文を巡らせ、さらに外面中位には竹管円形浮文を付す。12は精製の二段屈曲口縁鉢で、復元口径17.0cmを測る。調整は全面横方向ヘラミガキの後、内底面に放射状ヘラミガキを施す。13は小形高杯で、復元口径9.4cmを測る。調整は杯部ヨコハケ、脚柱部タテナデ、柄部内面ヨコハケで、裾部に四方孔を施す。14はやや扁平な棒状の不明木製品で、長さ34.2cm・幅2.2～2.7cm・厚さ約1cmを測る。下端部の両側縁に抉りが施されている。用途としては織機の一部か、あるいは刀形木製品の可能性がある。なお上端部から片面にかけて焼けている。

〈2区〉

重機による掘削を立会したが、明確な遺物包含層は確認されなかった。掘削土中からは古墳時代前期頃に比定される土器片2点を採取した。

3.まとめ

今回の調査では、1区で弥生時代以前の3枚の暗色帯、及び河川堆積層を確認したが、遺構は検出されなかった。

西の近畿自動車道調査地の調査成果からみて、本来ならば古墳時代前期を中心とした居住域・生産域が検出されるであろう層位の調査が、諸般の事情により行えなかった。特に1区では掘削土中より相当量の遺物が採取されており、亀井北で確認されている古墳時代前期の居住域が広がるのは確實といえる。

参考文献

- ・服部文彦 1986「第IV章第1節 基本層序」『亀井北（その1） 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文財発掘調査概要報告書』財團法人大阪文化財センター



1区 調査地周辺



1区 調査地



1区 5層上面 (T.P. +3.7m)



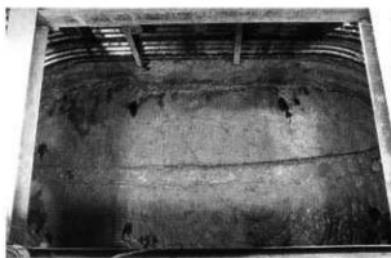
1区 1・3～5層 (T.P. +3.6 ~ 4.0m)



1区 9層上面 (T.P. +3.3m)



1区 5～9層 (T.P. +3.2 ~ 3.7m)



1区 11層上面 (T.P. +2.8m)



1区 10～13層 (T.P. +2.4 ~ 3.2m)



1区 人力掘削



1区 断面実測



1区 残土調査



1区 残土調査



2区 調査地周辺



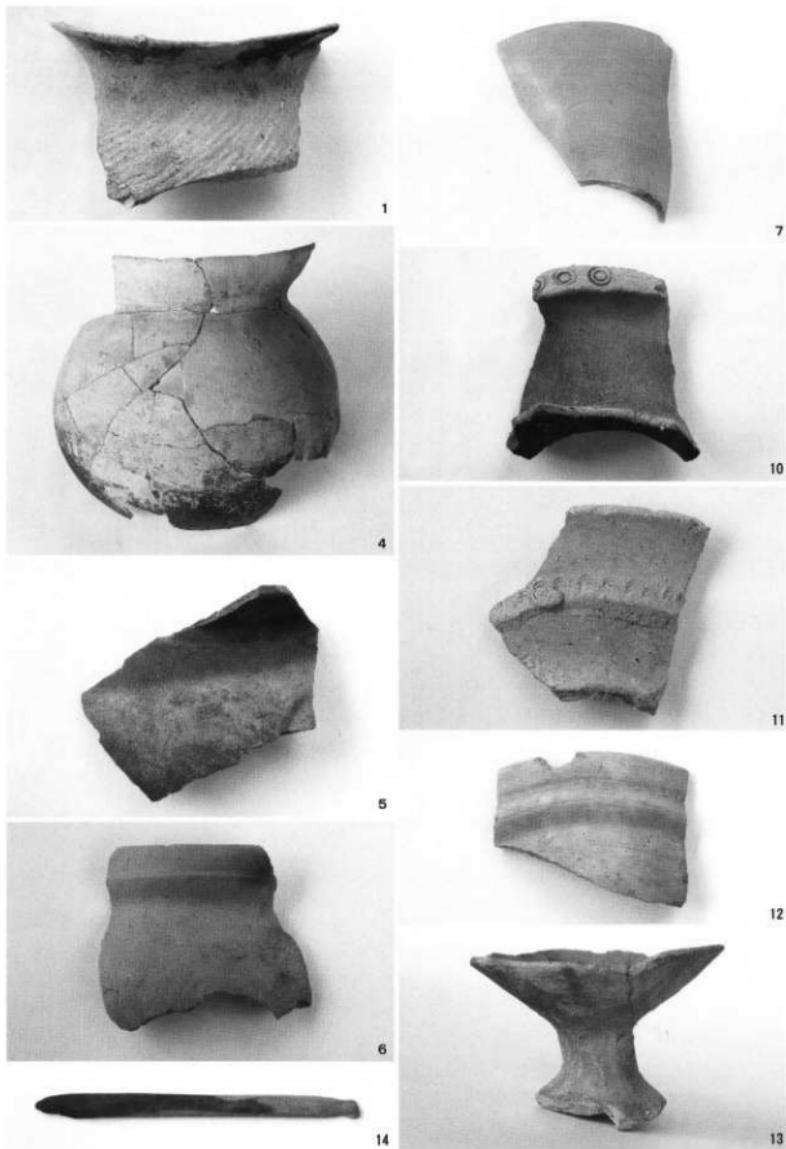
2区 重機掘削

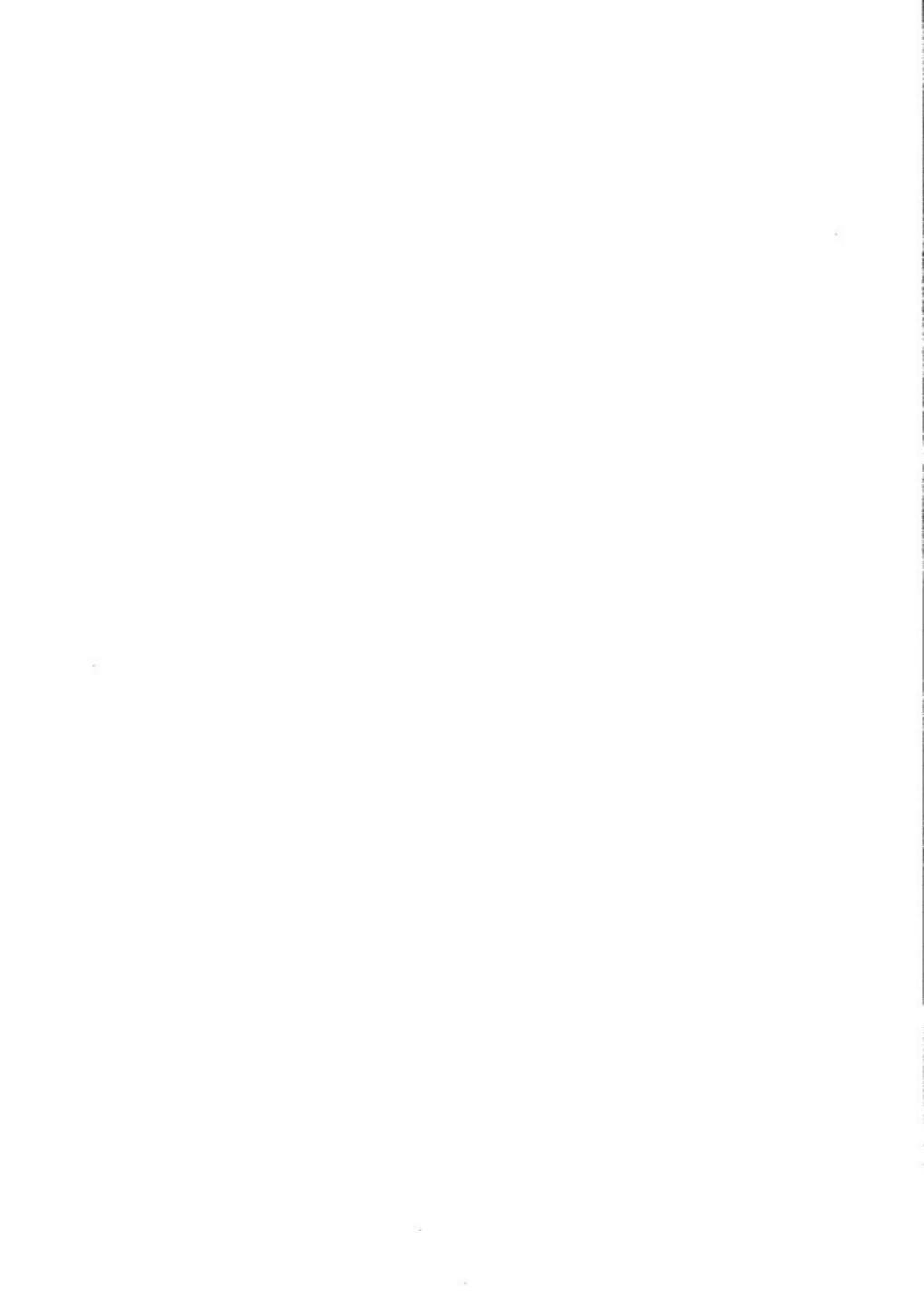


2区 重機掘削



2区 残土調査





III 久宝寺遺跡第67次調査（K H2005-67）

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市神武町他で実施した寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター送泥管築造工事(第4工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第67次調査(KH2005-67)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪府東部流域下水道事務所から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成17年9月1日～平成18年3月31日(実働夜間5日間)の期間で、樋口 薫と荒川和哉を調査担当者として実施した。調査面積は約45.40m²を測る。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成18年8月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、樋口が担当した。

本 文 目 次

1. 調査概要.....	23
1) 調査方法と経過.....	23
2) 基本層序.....	23
3) 検出遺構と出土遺物.....	23
2. まとめ.....	24

III 久宝寺遺跡第67次調査 (KH2005-67)

1. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は、寝屋川流域下水道整備工事(第4工区)に伴うもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第67次調査にある。本調査地は、南北を貫く主要地方道大阪中央環状線と東西に伸びる府道大阪港八尾線が交差する神武町交差点の南東角付近(1区)と北東角付近(2区)に位置する。調査は夜間に実施された。1区(発進立坑)は、平面形状が小判形を成す調査区で、面積は約29.40m²を測る。現地表(T.P.+7.64m)下4.3m前後までを調査した。2区(到達立坑)は、平面形状が円形を呈する調査区で、面積約16m²を測る。現地表(T.P.+7.67m)下1.5m前後までを調査した。いずれの調査も、八尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、機械と人力を併用して掘削を行い、遺構、遺物の検出に努めた。



第1図 調査区位置図

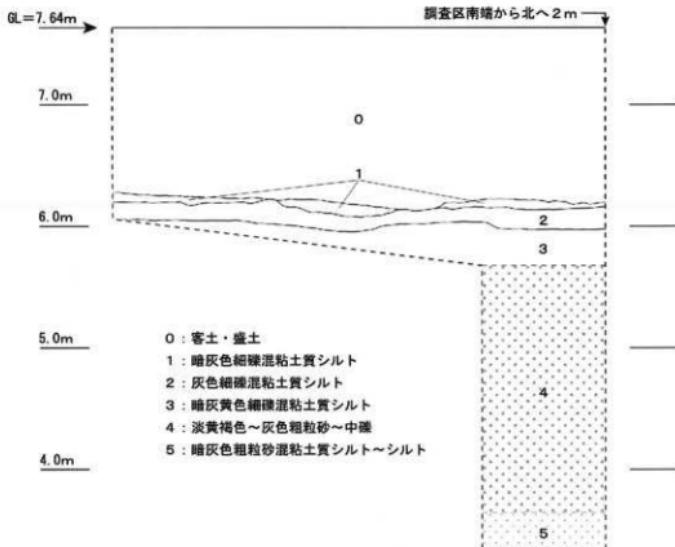
2) 基本層序

【1区】現地表(7.64m)下1.5m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下4.3m前後までの2.8mにおいて5層の地層を確認した。1層は、暗灰色を帯びた細緻混粘土質シルトである。攪拌の顕著な地層で、旧耕作土の可能性が考えられる。2層は灰色細緻混粘土質シルト。水田耕作土であろう。3層は暗灰黄色を呈した細緻混粘土質シルトである。雲状に酸化鉄分の沈着が認められ、土師器碎片の混入も目立つ地層である。層厚は30cmを測るが、さらに細分できる可能性を指摘しておきたい。4層は淡黄褐色～灰色の粗粒砂～中疊である。上方に向かうにつれて粗粒化の傾向を強める水成層である。ラミナ構造の発達した河川堆積物と推測される。5層は暗灰色粗粒砂混粘土質シルト～シルト。4層とは異なり、下位に向かって粗粒化を強め、シルト優勢層へと変化する。河川堆積物である。

【2区】現地表下1.5mまでは、埋設管の設置等に伴う搅乱層であった。

3) 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、検出遺構、出土遺物ともに皆無であった。



第2図 1区東壁断面模式図 ($S=1/40$)

3. まとめ

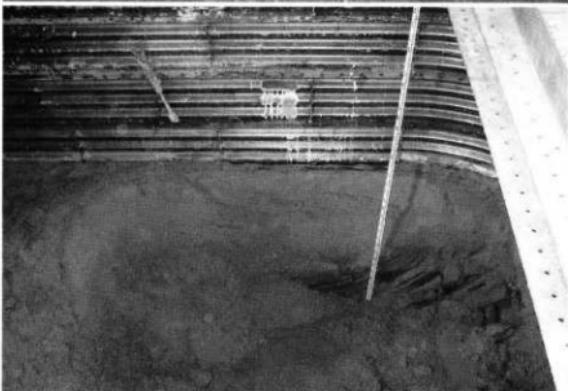
今回の調査地周辺を概観すると、1区の北西に隣接する地点では、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる久宝寺南(その3)の調査が実施されており、中世の鋤溝と、それ以前に堆積した層厚2mを越す河川堆積物を確認している。また、西方や東方では、それぞれ当調査研究会による第14次調査(西方)と第32次調査(東方)が行われており、古墳時代前期の居住域を形成する遺構群と、それらに伴う遺物が多量に出土した。今回の調査では、1区において、河川内埋土と推測される厚い砂疊層を観察したが、この状況は久宝寺南(その3)の成果に符合しており、当地付近が、第14次と第32次で検出した古墳時代前期の居住域を二分する河道域であった可能性が高くなかった。

参考文献

- 赤木克視・折本 哲 1986「久宝寺南(その3)」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 坪田真一 1993「10.久宝寺遺跡第14次調査(K H92-14)」「平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- 森本めぐみ 2000「15.久宝寺遺跡第32次調査(K H99-32)」「平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会



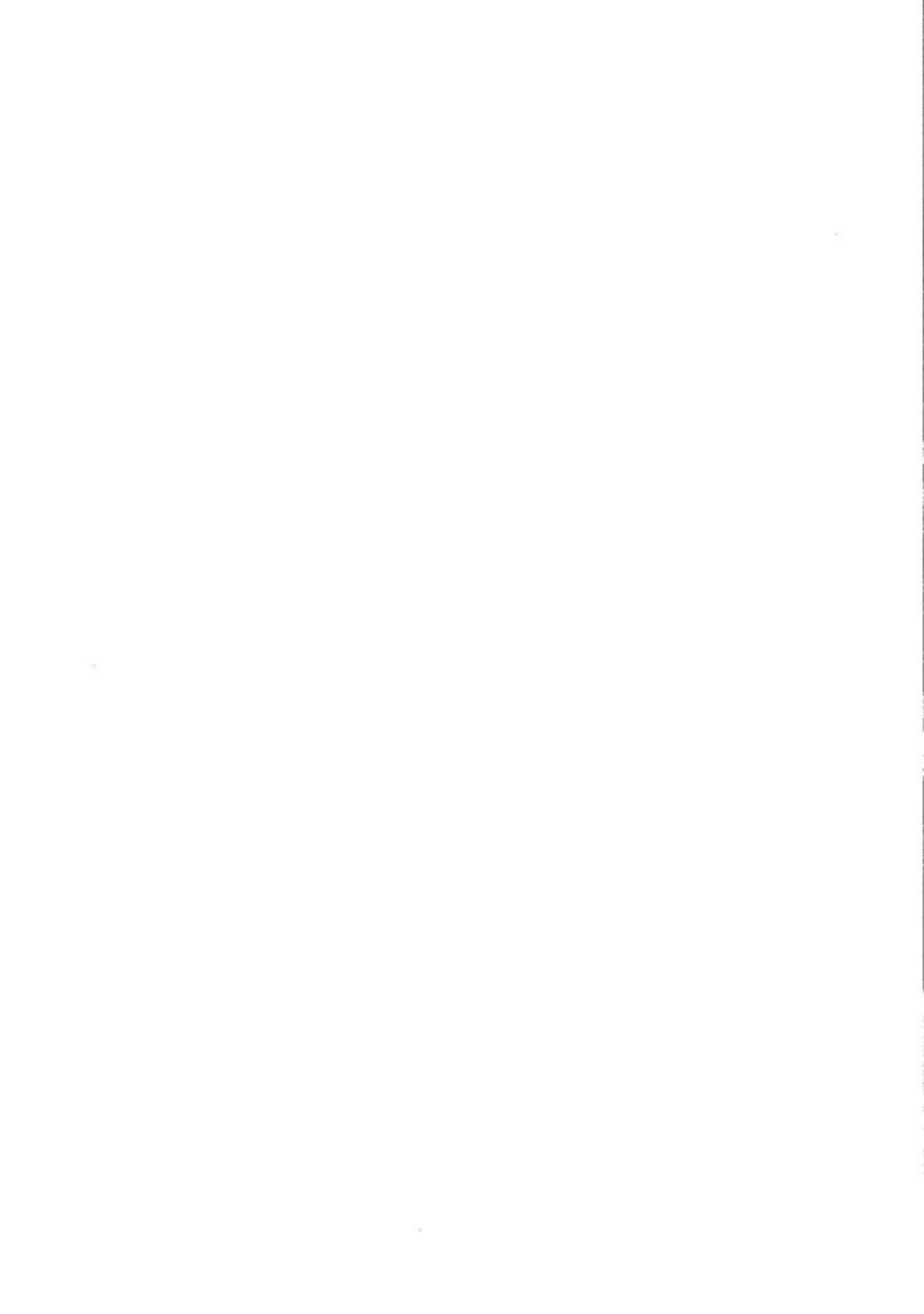
1区地層堆積状況
(T.P. +6.0~7.0m付近
: 北西から)



1区地層堆積状況
(T.P. +3.3~4.8m付近
: 西から)



2区掘削状況(北西から)



IV 久宝寺遺跡第69次調査 (K H2006-69)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市神武町他で実施した寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター送泥管築造工事(第2工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第69次調査(KH2006-69)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪府東部流域下水道事務所から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成18年6月21日～平成18年7月5日(実働9日)の期間で、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約20m²を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は垣内洋平・國津れいこ・鈴木裕治・竹田貴子・田島宣子・村井厚三である。
1. 内業整理は、現地調査終了後隨時実施し、平成18年9月に終了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－市森千恵子・國津・鈴木・藤中貴子、トレース・執筆・編集－西村が担当した。

本　文　目　次

1. 調査概要	27
1) 調査の方法と経過	27
2) 層序	27
3) 検出遺構と出土遺物	29
2. まとめ	32

IV 久宝寺遺跡第69次調査 (K H2006-69)

1. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター送泥管敷造工事(第2工区)に伴う調査で、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第69次調査(K H2006-69)である。調査地は立坑部分1箇所で、主要地方道大阪中央環状線がJR関西本線を跨ぐ高架部分である神武跨線橋の下に位置している。

調査区は東西3.5m・南北7.1mの平面長円形の立坑1箇所である。ライナープレート(高さ50cmの鋼板)を縫ぎ足しながら掘削を行った。調査は現地表下1.5mから8.2mまでを対象とした。平面図および断面図の高さは、下水工事で用いている数値(調査地より北東側にある跨線橋下のポイント[T.P.+8.133m])を使用した。

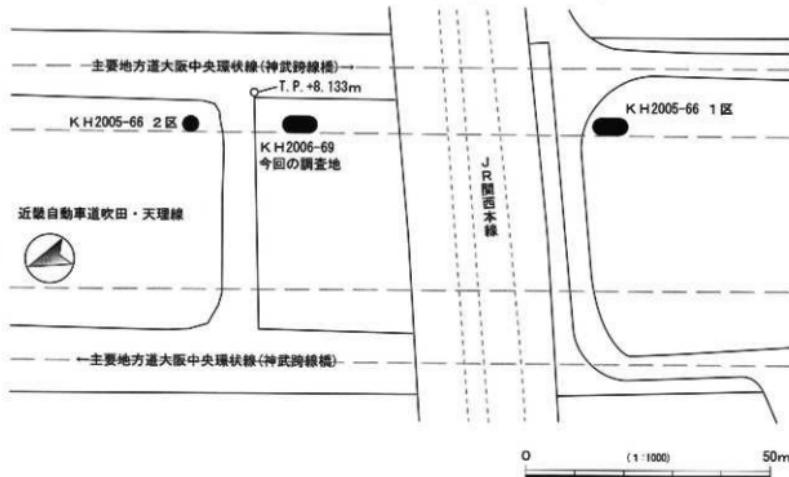
2) 層序

0層 盛土。上面の標高はT.P.+8.0m前後を測る。

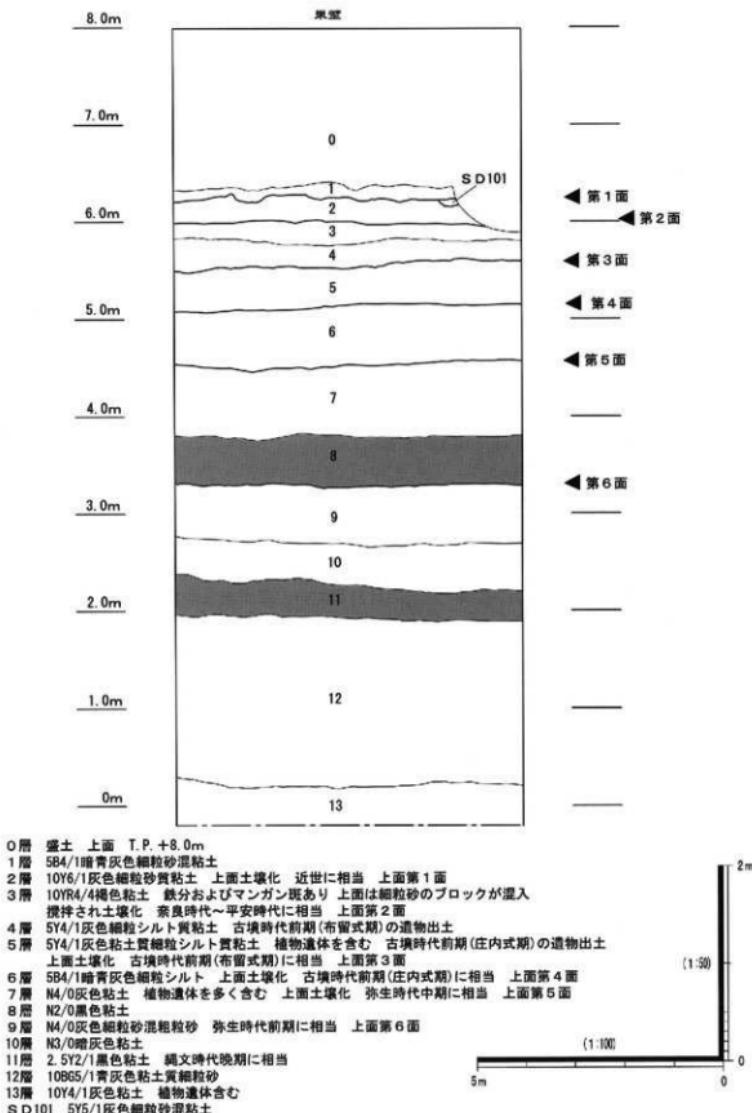
1層 5B4/1暗青灰色細粒砂混粘土。

2層 10Y6/1灰色細粒砂質粘土。上面は土壤化している。近隣で過去に行われている調査成果から近世頃の地層に相当する。上面は第1面で、遺構を検出した。

3層 10YR4/1褐色粘土。鉄分およびマンガン斑あり。上面は細粒砂のブロックが混入し、攪拌され、土壤化している。近隣で過去に行われている調査成果から奈良時代～平安時代頃の地層に相当する。上面は第2面で、遺構の検出はなかった。



第1図 調査区位置図



第2図 地層断面図

- 4層 5Y4/1灰色細粒シルト質粘土。古墳時代前期(布留式期)の遺物を含む。
- 5層 5Y4/1灰色粘土質細粒シルト質粘土。植物遺体を含み、古墳時代初頭(庄内式期)の遺物が出土した。上面は土壤化している。上面は第3面で、古墳時代前期(布留式期)に相当する遺構の検出があった。
- 6層 5B4/1暗青灰色細粒シルト。上面は土壤化している。上面は第4面で、古墳時代前期(庄内式期)に相当する遺構の検出があった。
- 7層 N4/0灰色粘土。植物遺体を多く含み、上面は土壤化している。弥生時代中期に相当する。上面は第5面で、遺構の検出はなかった。
- 8層 N2/0黒色粘土。
- 9層 N4/0灰色細粒砂混粗粒砂。弥生時代前期に相当する。上面は第6面で、遺構の検出はなかった。
- 10層 N3/0暗灰色粘土。
- 11層 2.5Y2/1黒色粘土。縄文時代晩期に相当する。
- 12層 10BG5/1青灰色粘土質細粒砂。縄文時代晩期以前の河川堆積。
- 13層 10Y4/1灰色粘土。植物遺体含む。

3) 検出遺構と出土遺物

第1面(2層上面 T.P.+6.2m)

近世の溝1条(S D101)を検出した。

S D101

調査地のはば中央で検出した。南北方向に伸びる溝で、幅0.7mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は5Y5/1灰色細粒砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

第2面(3層上面 T.P.+6.0m)

奈良時代～平安時代に相当するが、遺構の検出はなかった。

第3面(5層上面 T.P.+5.5m)

古墳時代前期(布留式期)の土坑1基(S K301)を検出した。

S K301

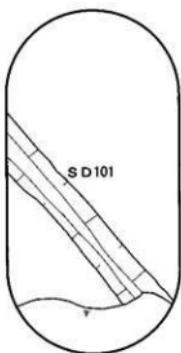
調査地の北側で検出した。平面形状は南北方向に長い楕円形で、長径2.0m、短径1.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/1褐色細粒シルト混粘土で、古墳時代前期(布留式期)の遺物が出土した。このうち(1)を図化し掲載した。1は小形壺である。体部から「く」の字に屈曲し、内湾気味に伸びる口縁部をもつ形状で、内外面ともにヨコナデを施す。

第4面(6層上面 T.P.+5.1m)

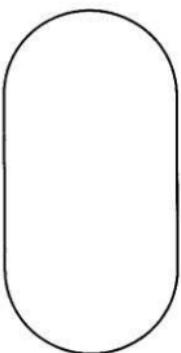
古墳時代初頭(庄内式期)の土坑3基(S K401～403)を検出した。

S K401

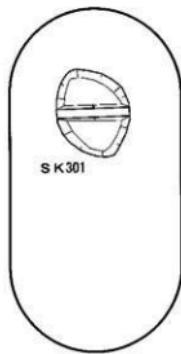
調査地の北西側で検出した。平面形状南北方向に長い楕円形で、長径0.6m、短径0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は10YR2/1黒色細粒砂混粘土で、古墳時代初頭(庄内式期)の遺物が出土した。



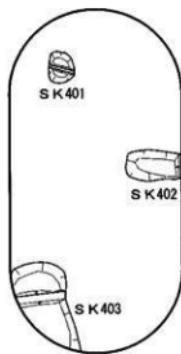
1面(2層上面 T.P. +6.2m)



2面(3層上面 T.P. +6.0m)



3面(5層上面 T.P. +5.5m)



4面(6層上面 T.P. +5.1m)



5面(7層上面 T.P. +4.55m)



6面(9層上面 T.P. +3.3m)

0 (1:100) 5m

第3図 平面図

S K 402

調査地の東側で検出した。遺構の東側は調査区外に至るため平面の形状不明である。検出した平面形状は長方形で、長径1.25m、短径0.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.25mを測る。埋土は5Y2/1黒色粘土で、古墳時代初頭(庄内式期)の遺物が出土した。

S K 403

調査地の南西側で検出した。遺構の南西側は調査区外に至るため平面の形状不明である。検出した平面形状は長方形で、長径1.9m、短径1.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1mを測る。埋土は2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土で、古墳時代初頭(庄内式期)の遺物が出土した。このうち(2)を図化し掲載した。2は壺である。直線的に外側へ伸びる口縁部で、端部は外側に面をもつ。端面は四線状にくぼむ。内外面ともにハケのち左上がりのミガキを施す。

第5面(7層上面 T.P.+4.55m)

弥生時代中期に相当するが、遺構の検出はなかった。

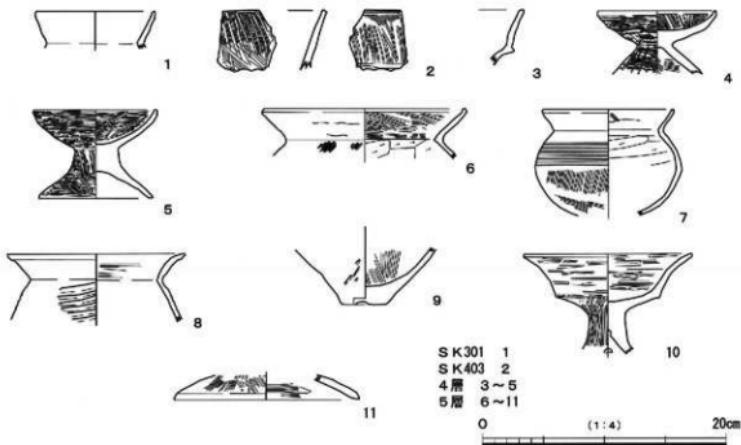
第6面(9層上面 T.P.+3.3m)

弥生時代前期に相当するが、遺構の検出はなかった。

遺構に伴わない出土遺物

4層からは古墳時代前期(布留式期)の遺物が出土した。このうち(3~5)を図化した。3は壺である。口縁端部は内傾する面をもつ。内外面ともにヨコナデを施す。器形の特徴から山陰系であると思われる。4は器台である。浅い皿状の受部で、裾部は「ハ」の字にひらく。受部の端部は凹線状にくぼむ面をもつ。受部内面ナデのち放射状ミガキを施す。外面ケズリのち横方向のミガキを施す。裾部の内面はハケ、外面はミガキを施す。受部内面は全体的に黒い。5は器台である。やや深みのある皿状の受部で、裾部は「ハ」の字にひらく。受部の端部は丸く終わる。裾端部は面をもつ。受部の内外面はナデのち横方向のミガキを施す。裾部の内面はナデ、外面はミガキを施す。

また、5層からは古墳時代初頭(庄内式期)の遺物が出土した。このうち(6~11)を図化し掲載した。6は壺である。体部から「く」の字に屈曲し、外反する口縁部で、端部は内側につまみ出しだ面をもつ。口縁部内面横方向のハケのちナデ、外面ヨコナデを施す。体部内面ケズリ、外面右上がりのタタキを施す。角閃石を含む生駒西麓産である。7は壺である。体部から「く」の字に屈曲し、やや内湾気味に伸びる口縁部で、端部は丸く終わる。口縁部内面ハケのちナデ、外面ヨコナデを施す。体部内面下位ナデ、上位ケズリを施す。外面下位斜め方向のハケ、上位横方向のハケを施す。体部外面に焼付着。8は壺である。体部から「く」の字に屈曲し、外反する口縁部。口縁部内外面ナデを施す。体部内面ハケのちナデ、外面右上がりのタタキを施す。体部外面に焼付着。9は壺である。突出する平底の底部で、底部外面中央部はくぼむ。体部内面ハケのちナデ、外面右上がりのタタキのちナデを施す。体部外面に焼付着。10は高杯である。平らな杯底部から口縁部は外反する。杯口縁部内外面横方向のミガキ、杯体部内外面ミガキを施す。脚部外面縦方向のミガキ、内面ナデを施す。脚部にはスカシ孔がある。11は高杯である。「ハ」の字にひらく裾部で、内面横方向のハケのちナデ、外面縦方向のハケのちナデを施す。スカシ孔が開いている。



第4図 出土遺物実測図

2.まとめ

弥生時代前期に相当する第6面および、弥生時代中期に相当する第5面では、遺構の検出はなかった。

古墳時代初頭(庄内式期)に相当する第4面と古墳時代前期(布留式期)に相当する第3面では、土坑の検出および遺物の出土があった。西に隣接する久宝寺南(その2)調査地の第4遺構面d【弥生時代末から古墳時代初頭前半(庄内期古段階)】と第4遺構面c【古墳時代初頭後半(庄内期新段階)】に対応すると推測でき、今回の調査と同様、遺構の検出および遺物の出土が確認されている。したがって今回の調査地一帯は当該期の居住域であったことが判明した。

平安時代～奈良時代に相当する第2面では、遺構の検出はなかった。しかし上面は攪拌されていることから、近隣に生産域(水田あるいは畑)が存在していた可能性が高いと考えられる。

近世に相当する第1面では、溝を検出した。南北方向に直線に伸びる形状であることから、条里に伴う耕作の溝である可能性が高いと思われる。

参考文献

- ・寺川史郎他 1987『久宝寺北(その1～3)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財團法人大阪文化財センター
- ・赤木克視他 1987『久宝寺南(その2)～久宝寺・加美遺跡の調査～近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・坪田真一 1993「10.久宝寺遺跡第14次調査(KH92-14)」『平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 2000「15.久宝寺遺跡第32次調査(KH99-32)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会



第1面（南から）



第2面（南から）



第3面（南から）



第4面（南から）



第5面（南から）



第6面（南から）

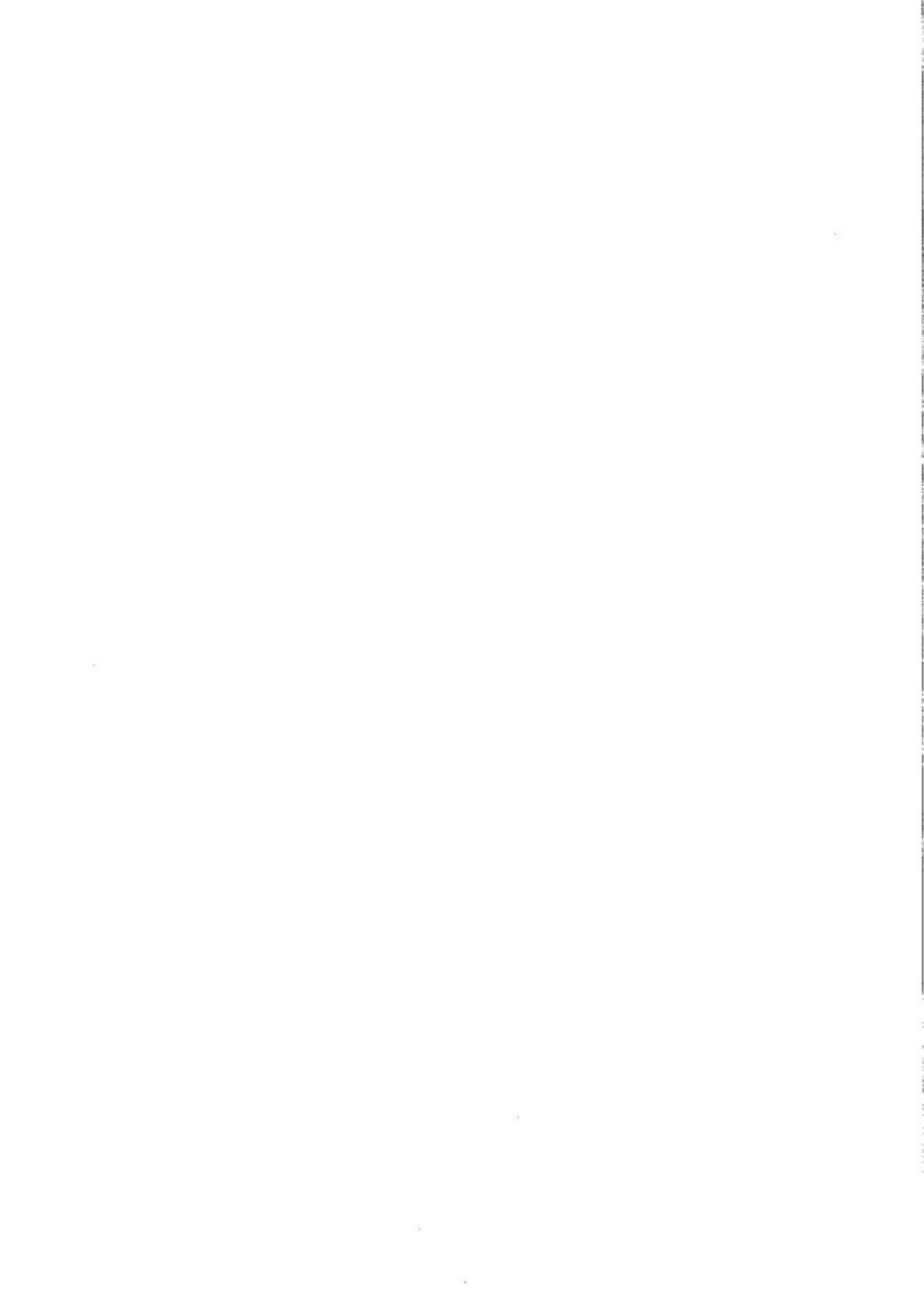


東壁[T.P. +6.0~5.3m]（西から）



5

出土遺物



V 久宝寺遺跡第72次調査 (K H2006-72)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市神武町他で実施した寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター送泥管築造工事(第4工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第72次調査(KH2006-72)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪府東部流域下水道事務所から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成18年12月18日～平成19年3月31日(実働10日間)の期間で、樋口　薰を調査担当者として実施した。調査面積は約32m²である。
1. 現地調査にあたっては、青山　洋・岩沢玲子・垣内洋平・曹　龍・鷹羽佑太・竹田貴子・田島宣子・橋本黄士が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成19年1月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、樋口が担当し、写真編集を青山が補佐した。

本　文　目　次

1. 調査概要	35
1) 調査方法と経過	35
2) 基本層序	35
3) 検出遺構と出土遺物	36
2. まとめ	41

V 久宝寺遺跡第72次調査 (K H 2006-72)

1. 調査概要

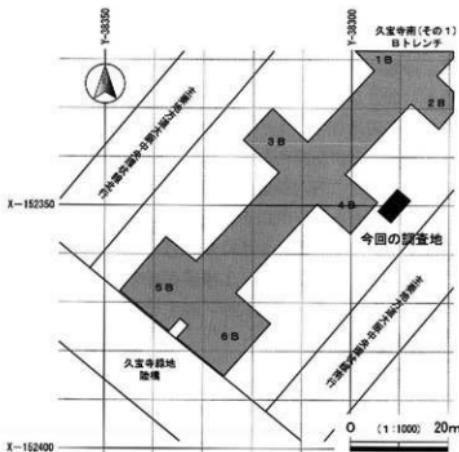
1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は、寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター送泥管築造工事(第4工区)に伴うもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第72次調査にあたる。本調査地は、南北を貫く主要地方道大阪中央環状線と東西に伸びる府道大阪港八尾線が交差する神武町交差点の北東約350m、近畿自動車道南行き線直下に位置する。調査区は、東西約3.6m、南北約8.4mの南北に長い長方形を呈する。面積は約32m²である。調査は、八尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、現地表(T.P.+7.11m)下1.5mまでを機械により、以下現地表下5.0mまでの3.5

m間を機械と人力を併用して掘削を行い、遺構、遺物の検出に努めた。また時間の許す限り、工事により破壊を受ける深度までの地層観察を行うことを心掛けた。その結果、現地表下11.7m前後(T.P.-4.6m)までの地層断面を確認することができた。

2) 基本層序

現地表(7.11m)下1.2m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)であった。以下現地表下11.7m前後までの10.5m間において32層の地層を確認した。1~3層は、近世陶磁器や瓦の碎片が混在する灰色~褐灰色粗粒砂~細礫混粘土質シルト~細粒砂。攪拌の顕著な地層で、水田耕作土の可能性が考えられる。この内、酸化の著しい2層は畦畔の可能性が高い。4層はにぶい黄橙色シルト質粘土~粘土質シルトである。炭化物が混在する土壤化層である。本層上面において、第1面を検出した。5~6層は灰黄褐色~褐灰色シルト質粘土~シルトである。ラミナ構造の発達した河川堆積物である。7層は黒褐色粗粒砂~細礫混シルト質粘土~粘土質シルト。古墳時代初頭(生内式期)の土器細片が混在する土壤化層である。上面において、第2面を検出した。8層は緑灰色~明緑灰色シルト~中粒砂である。ラミナ構造が発達した河川堆積物である。本層上面が第3面に相当する。9層は灰色シルト質粘土。粘性の強い湿地性堆積物である。10層はラミナ構造を有する明緑灰色シルト。11層は灰色シルト質粘土。湿地性堆積物である。本層はラミ



第1図 調査地位置図

ナ構造の有無によりさらに3層(11-1~3層)に細分できた。この内11-2層は、植物遺体や炭化物がラミナ状に介在する地層である。12層は暗灰色シルト質粘土。攪拌を受けた地層で、水田耕作土の可能性が考えられる。本層下面是、変形構造により層相の亂れが顕著である。13層は緑灰色シルト質粘土。グライ化の目立つ湿地性堆積物である。14・15層はラミナ構造の発達した明緑灰色~暗オリーブ灰色粘土質シルト~シルトである。16層は黒褐色シルト質粘土。湿地性堆積物である。17・18層は灰白色~灰色シルト質粘土~中粒砂。ラミナ構造の発達した河川堆積物である。19~23層は黒色~灰色シルト質粘土である。いずれの地層も粘性に富んだ湿地性堆積物である。この内、19層は植物遺体がラミナ状に介在していた。また、21・23層はその層相から暗赤帯に比定できる可能性が考えられる。24層は、諸事情により、地層の観察ができなかった部分である。ただし、工事関係者の方々からはラミナ構造を有した砂礫層であったことを伺っており、河川堆積物であったことが予測される。25~29層は灰褐色~灰色シルト質粘土である、粘性の強い湿地性堆積物である。この内27層は、層厚1~2cmの灰色細粒砂~中粒砂である。おそらく本調査地周辺に存在したであろう河川から供給された溢粒堆積物と推測される。30層は灰色粗粒砂~極粗粒砂混粘土質シルト。ラミナ状に貝化石を包含する地層である。31層は諸事情により、地層の観察ができなかった部分である。工事関係者の話によると、概ね砂礫層であったということである。32層は灰白色極細粒砂~極粗粒砂。流木を多く含む河川堆積物である。

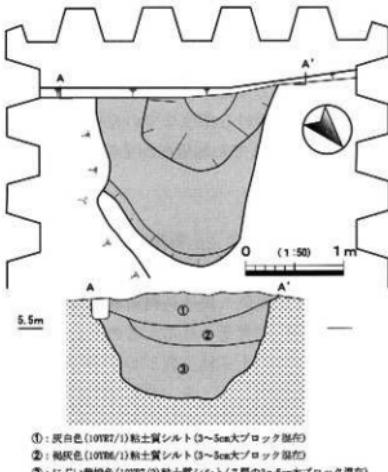
3) 検出遺構と出土遺物

第1面

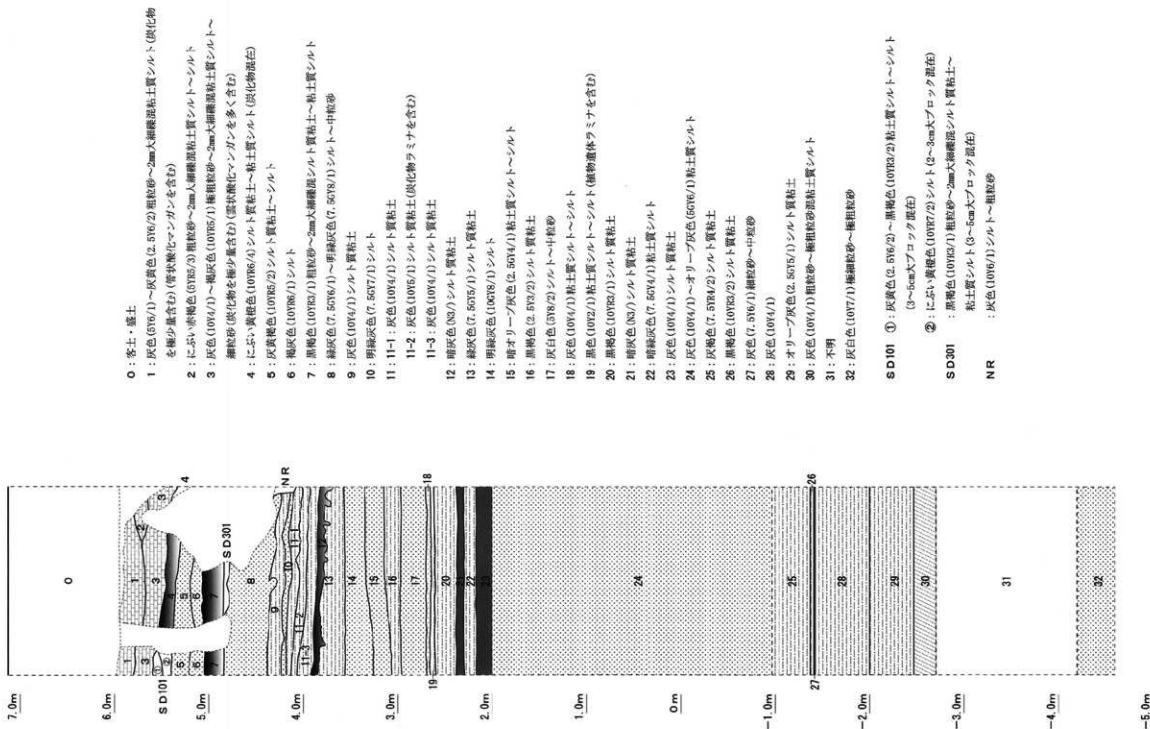
近世に比定される水田耕作土の3層を除去後、4層上面で平面精査を行い、検出した遺構面である。標高は5.5m前後を測る。4層は、土壤化の進行が著しいことから一時期の地表面に近いことが推測されるが、上位には攪拌層の3層が形成されることから、本来の上面は削平を受けた可能性が高い。土坑を1基(SK101)と溝を1条(SD101)検出した。

SK101

調査区南端で検出した土坑と推測される。本土坑は南部分が調査外に伸びるため、全容は不明。検出規模は長(南北)軸が1.9m以上、短(東西)軸が1.8m以上である。断面形状は椀形を呈し、深さは0.9mを測る。埋土はブロック土の3層(①~③層)に分層できた。この内③層には、本土坑の加工時に混在したと考えられる7層がブロック状に混在していた。出土遺物は③層の最下層より土師器が1点出土したが、細片のため図化はできなかった。



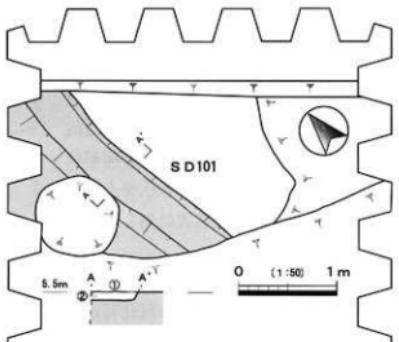
第2図 SK101 平・断面図



第3図 地質断面模式図 (S=1/40)

SD 101

調査区北西隅で検出した南北に直線的に伸びる溝の東肩付近と推測される。本溝は北、西、南部分が搅乱及び調査外に至るため、全容は不明である。検出規模は長さが2.3m以上、幅が1.0m以上である。深さは0.1mと浅い。断面形状は浅い皿形を呈する。埋土は2層(①・②層)に区分できた。いずれもブロック土が充填されていた。この内①層からは、須恵器細片が1点出土した。細片のため、図化は不可。



①：灰褐色(5Y6/2)～褐褐色(10YR3/3)粘土質シルト～シルト(3~5cm大ブロック混在)
②：にぶい黄褐色(10YR7/2)シルト(2~3cm大ブロック混在)

※：①層は北側にて確認

第4図 SD 101 平・断面図

第2面

河川堆積物である6層を除去し、古墳時代初頭(庄内式期)に形成された7層の上面において平面精査を行い、検出した遺構面である。標高は5.0m前後を測る。7層は、その上面が6層水成層に削平を受けた可能性が高い。よって、遺構基盤面は不明である。土坑を1基(SK 201)検出した。

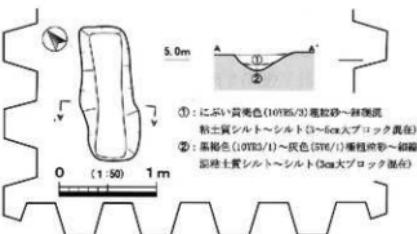
SK 201

調査区南西部で検出の土坑である。

平面形状は、南南西-北北東に主軸を有する隅丸方形である。規模は長軸が1.4m、短軸が0.6m、深さは0.16mを測り、断面形状は浅い椀形を呈する。埋土はブロック土の2層(①・②層)から成る。出土遺物は無し。

第3面

土壤化層である7層を除去し、水成層である8層上面において平面精査を行い、検出した遺構面である。標高は4.8m前後を測る。8層はラミナ構造の発達した水成層であり、本層上方において土壤化の進行した様相は認められない。したがって当層上面が遺構基盤面であった可能性は低い。おそらく、7層上面、または7層内に遺構基盤面を有した可能性が高い。溝を1条(SD 301)検出した。



第5図 SK 201 平・断面図

SD301

調査区北東隅で検出した溝と推測される。本溝は、北、東、南部分が擾乱及び調査外に至るため全容は不明であるが、西方に中心点を持つ円弧を描いていた可能性が考えられる。検出規模は長さが2.2m以上、幅が1.1m以上である。深さは0.04mと浅く、断面形状は浅い皿形を呈する。埋土はブロック土の単層(①層)を確認した。出土遺物は無し。

30層内出土遺物

30層内より、遺存状態の良好な貝化石が大量に出土した。貝化石は、水平方向に発達したラミナ構造を有する地層に層理を形成して介在することが確認されており、したがって

自然堆積層中のものである。捕食した貝類の殻を遺棄したものが層を成して堆積した、いわゆる貝塚(水野・小林1959)ではない。この成果は、本層と本調査地一帯の地形・堆積環境を知る上で貴重な成果として注目に値する。

貝化石は、斧足網(二枚貝)が2種類(1・2)、腹足網(巻き貝)が4種類(3~6)、掘足網(角貝)が1種類(7)の計7種類を確認した。貝化石の遺存状態については、腹足網の貝化石は良好であるが、斧足網のものはチョーク化が進行し、完存した個体は皆無であった。

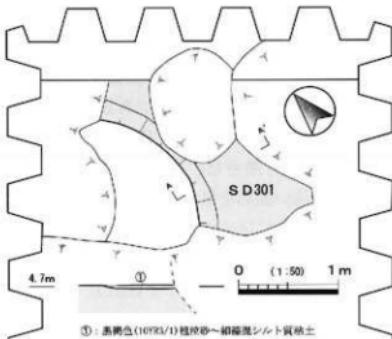
斧足網 1はフネガイ科、2はマルスダレガイ科に帰属の二枚貝と推測される。この内1の殻表には32本の放射肋が特徴的である。2に類似する貝化石は、出土量がもっとも多かった。

腹足網 3はタマガイ科のツメタガイの可能性が高い。4はオリイレヨフバイ科のムシロガイに類似する。5・6はウミニナ科。この内5はヘナタリ、6はイボウミニナと推測される。

掘足網 7はクチキレクモガイ科に属する角貝である。緩やかに反り返り、断面形状が8角形を呈するもので、ヤカドツノガイの可能性が考えられる。

表1 第30層内出土貝化石一覧

写真番号	貝化石の種類		貝の棲息地とその環境
	網	科	
1 斧足網 (二枚貝)	フネガイ科	不明	概ね房総以南の水深5~20mの細砂底、潮間帯~水深10mの泥底などに棲息する。
2 斧足網 (二枚貝)	マルスダレガイ科	不明	概ね房総以南の潮間帯~水深50mの細砂泥底~砂泥底、砂底などに棲息する。
3 腹足網 (巻き貝)	タマガイ科	ツメタガイ	北海道以南の潮間帯下の細砂底に棲息する。
4 腹足網 (巻き貝)	オリイレヨフバイ科	ムシロガイ	陸奥湾以南の潮間帯の砂礫底に棲息する。
5 腹足網 (巻き貝)	ウミニナ科	ヘナタリ	本州以南の潮間帯の砂泥底に棲息する。
6 腹足網 (巻き貝)	ウミニナ科	イボウミニナ	北海道南部以南の潮間帯の砂泥底に棲息する。
7 掘足網 (角貝)	クチキレクモガイ科	ヤカドツノガイ	北海道以南の内湾の水深5~30mの砂泥底に棲息する。



第6図 SD301 平・断面図

上記の貝化石は、概ね北海道以南の潮間帯～水深50mの泥底、細砂泥底、砂底、砂礫底に分布することが知られている。貝化石の種類により貝化石出土地点の地形環境を限定することは困難であるが、海水域に棲息する貝であることは確実であることから、本調査地周辺が一時期海水域であったことが判明した。

2. まとめ

今回の調査地の西隣では、大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センターによる久宝寺南(その1)Bトレンチの調査が実施されている。ここでは、縄文土器を含む当該期の河川を検出したほか、弥生時代中期末～後期初頭には7基の方方形周溝墓と水田が並存して展開していたことを明らかにした。また古墳時代に入ると、前期(布留式期)において、6基の周溝墓とこれらに関連する可能性の高い多量の土器集積を検出した。その後は、概ね水田を中心とした生産域として利用されるが、平安時代に入ると、掘立柱建物の検出から理解できるように、一時期居住域を形成したことなどが明らかになった。

このような状況下、今回の調査では7層が注目される。本層は、古墳時代初頭(庄内式期)の遺物を含む黒褐色を帯びた土壤化層で、上面において第2面を、下面において第3面をそれぞれ検出した。この内第3面については、遺構基盤面が本層上面あるいは本層内に存在した可能性が高いことから、概ね本層上面が遺構の構築されやすい環境にあったことは容認できるものと考える。この7層は、先述の久宝寺南(その1)の調査における古墳時代前期墓域の基盤層に対応する可能性が高い。したがって、本調査検出のSD301は、その平面的特徴から、当該期の墓域に関連する溝であった可能性も考えられる。

一方、30層にも注目したい。本層は、貝化石を包含する自然堆積層であることは先述の通りである。形成時期は、縄文時代後期の河内湾の時期に相当する可能性が高い。貝化石の特徴からは、本層形成期における本調査地一帯が海水域であったことを明らかにした。これまでに八尾市域では、市域の北東部に位置する池島・福万寺遺跡や大竹西遺跡において、貝化石を包含する自然堆積層を確認している(秋山他2000・樋口2001)。この内大竹西遺跡では、縄文時代後期の河内湾の頃に比定される、汽水域に棲息する貝化石が出土しており、付近一帯の地形環境が、内湾最奥部で、しかも河川の河口付近に位置したことを明らかにした。これに比較すると、本調査出土の貝化石には、汽水あるいは淡水性のものが含まれていない点が特徴的である。おそらく、内湾の内、沿岸からは若干離れた地点に位置した可能性が考えられる。

参考文献

- ・赤木克視・林木 哲 1986『久宝寺南(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・水野清一・小林行雄編 1959『岡解考古学辞典』東京創元
- ・波部忠重・小菅貞男 1967『貝』『標準原色図鑑全集3』
- ・秋山浩三他 2000『池島・福万寺遺跡1(98-3・99-1調査区)』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第48集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・樋口 薫 2001『IV 大竹西遺跡(第4次調査)』『財团法人八尾市文化財調査研究会報告67』(財)八尾市文化財調査研究会



SK101 検出状況(北東から)



SK101 掘削状況(北東から)



SK101 断面(北東から)



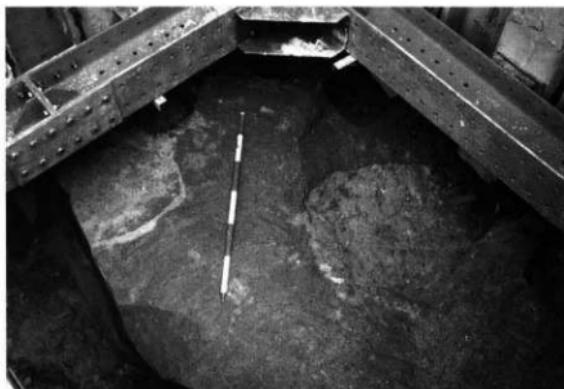
SD 101 検出状況(南東から)



SD 101 挖削状況(南東から)



SK 201 挖削状況(北東から)



第2面 精査状況(南東から)



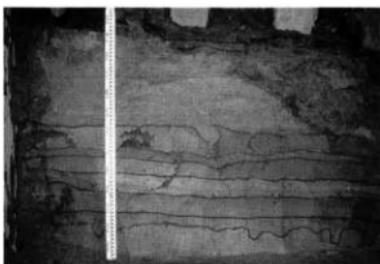
S D301 検出状況(南東から)



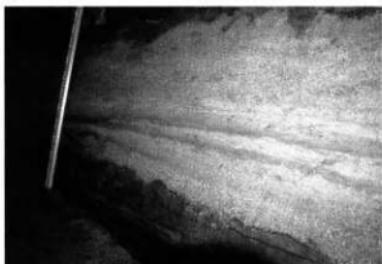
S D301 振削状況(南東から)



1～6層 堆積状況(北壁:南から)



8～13層 堆積状況(北壁:南から)



8～13層 堆積状況(南壁:北西から)



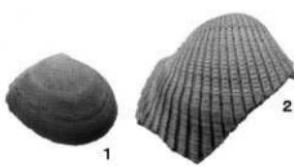
20～23層 堆積状況(北壁:南東から)



30層:貝化石包含状況(西壁:東から)

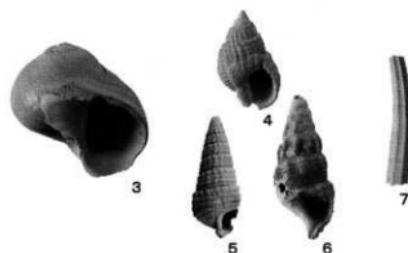


32層:流木混在状況(東から)



0 (1:1) 6 cm

30層内出土貝化石(番号は表に対応)



報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしふんかざいちょうさけんきゅうかいほうく103
書名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告103
副書名	I 久宝寺遺跡（第64次調査） II 久宝寺遺跡（第66次調査） III 久宝寺遺跡（第67次調査） IV 久宝寺遺跡（第69次調査） V 久宝寺遺跡（第72次調査）
卷次	
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	103
編著者名	I・IV 西村公助、II 坪田真一、III・V 橋口薫
編集機関	財団法人八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	2007年3月31日

所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
久宝寺遺跡 (第64次調査)	大阪府八尾市北久宝寺3丁目地内	27212	23	34度37分40秒	135度35分07秒	20050516～ 20050714	110	公共下水道
久宝寺遺跡 (第66次調査)	大阪府八尾市神武町他	27212	23	34度37分15秒	135度34分44秒	20060217～ 20060303	27	公共下水道
久宝寺遺跡 (第67次調査)	大阪府八尾市神武町他	27212	23	34度37分23秒	135度34分49秒	20050901～ 20060331	45.40	公共下水道
久宝寺遺跡 (第69次調査)	大阪府八尾市神武町他	27212	23	34度37分15秒	135度34分44秒	20060621～ 20060705	20	公共下水道
久宝寺遺跡 (第72次調査)	大阪府八尾市神武町他	27212	23	34度37分33秒	135度34分56秒	20061218～ 20070115	32	公共下水道

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡 (第64次調査)	集落	古墳時代後期以降 弥生時代後期 縄文時代晚期～弥生時代中期	地層	弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器	
久宝寺遺跡 (第66次調査)	集落	古墳時代初頭～前期		土師器	
久宝寺遺跡 (第67次調査)		中世以前	河川		
久宝寺遺跡 (第69次調査)	生産域	近世	溝		
	集落	奈良～平安時代	地層		
		古墳時代前期	土坑	土師器	
		古墳時代初頭	土坑	土師器	
		弥生時代中期	地層		
		弥生時代前期	地層		
久宝寺遺跡 (第72次調査)		古墳時代前期？	土坑・溝		
		縄文時代後期？		貝化石	

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告103

- I 久宝寺遺跡（第64次調査）
- II 久宝寺遺跡（第66次調査）
- III 久宝寺遺跡（第67次調査）
- IV 久宝寺遺跡（第69次調査）
- V 久宝寺遺跡（第72次調査）

発行
編集 平成19年3月
財團法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX (072) 994-4700

印刷 梶近畿印刷センター
〒582-0001
大阪府柏原市本郷5丁目6番25号
TEL (072) 972-5918
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
図版 マットアート <70Kg>

